
沈没

酒井 真言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沈没

【Nコード】

N3640P

【作者名】

酒井 真言

【あらすじ】

長期旅行者の坂田はインドの日本人宿に泊まっていた。そこでは大麻を社交道具として、縛られない日本人が長期滞在しては、無為な生活を気ままに送っていた。

—

坂田は左腕をのばし、汚れがめだつ座卓のうえの扇風機をとめた。力のぬけたはねの回転を見て、座卓にイギリスのアダルト誌を置き、右手に持っていたポリ エチレンの袋から茶色く乾燥した大麻をひとつかみして、ひざをついた赤いビキニ姿の金髪女性の表紙に出した。あまつたるく、だらしない女性の顔を茶色いく ずが隠した。坂田はたんねんに種と小枝を取りのぞいて、そばにあったハサミで大麻を細かくきざんだ。空気の流れのない部屋がぼんやりと蒸しだした。

「おいおい、なんだよこれ、カラツカラじゃん。すっかりミイラになりやがって」

坂田は袋のジッパーを閉め忘れたことを思いだした。インドの乾燥した空気は残りわずかな大麻の水分を一晚のうちに奪っていた。

坂田は大麻が飛び散らないよう、ていねいにハサミを動かした。すると、いきなりかがめていた体を起こし、黒いＴシャツを脱いでベッドに放り投げた。白くかすれたＴシャツはふにやっとシーツのうえに落ちた。黒く日焼けしたガリガリの体はうっすらとしめりはじめ、ベッドに沈んでいた尻とももの裏はわずかにぬれていた。

「うおー！ 朝っぱらからひでー暑さだ！」

坂田は枕元のタオルを首にかけて、顔を三度こすってから大麻を

きざみはじめた。ハサミの動きはさきほどよりも早かった。

坂田は左手で細かくなつた大麻をつまみ、親指と人差し指でこすつた。念のためさらに十何度ハサミをくわえてから、アルファベツトで書かれた名刺で一ヶ所に集めた。厚い唇とたれた眼の顔が見えた。黒いバツクパツクからB六サイズのガイドブックを取りだし、厚手の表紙を横長の長方形に小さく切り取り、紙切れをダンゴ虫のように丸めてローチを作つた。リズラ社製の青い巻紙を一枚抜き、指でつまんだ大麻のくずを紙のうえに均等にならべ、丸めたローチを端にのせて慎重に巻きはじめた。坂田は呼吸をおさえていると、顔に汗のしずくが線をひいた。

「グツモーニング！ グツモーニング！ アサダヨ！ チャーイ！
チャーイ！」

インド人の若い男が声をあげて部屋に入ってきた。坂田は手に持っていた巻紙を揺らしてしまい、大麻がすこしこぼれて地面に落ちた。

「おい！ びつくりさせんなよ！ もっと静かに入つてこれないのか？」

坂田は両手に持った巻紙から目線をあげ、眼の白さが目立つ顔をにらみつけた。

「ナニイウノ！ チャイモツテキタヨ。アナタ、アサカラ、ボンネ？」

「見りゃわかるだろう」

「マツタク、ドウシヨウモナイネ。チャイハドコオク？」

「よけいなお世話だ！　そこに置いてくれ」

「ワツカタヨ」

若いインド人は扇風機のそばに銀色のコップを置き、笑いながら坂田の顔を確かめるように見た。問題なさそうに見えたのか、細い首を一度横に傾^{かし}げてから部屋を出て行った。

坂田はアダルト誌から大麻をつかみ、再び巻紙にふりかけた。右手でローチの部分をつくりとるところがして、両手の人差し指と親指を使って隙間なく巻き、均一に巻かれた胴を口元にちかづけ、舌先をのばし、両手を横にひいて紙を濡らした。湿った部分を胴にピツタリと貼りつかせ、坂田は吸い口であるローチをしたにして座卓にトントンとはずませた。それから、大麻のつまっていない先端部分をつまみ、手首を動かして数回振ってから、余った先端部分の紙をねじった。

坂田は出来上がったばかりのジョイントの先端にライターの火をちかづけ、ジョイントまわしながら火をつけた。炎はカツと燃えたち、すぐにひよるながい白い炭が残った。飲み口の黒ずんだ空き缶に、灰をトンツと落とし、坂田がジョイントを口にくわえて大きく吸いこむと、先端はマグマのように光り、太い筋の煙が浮かびあがった。坂田は呼吸を止め、ジョイントの先を空き缶にふれないように置き、新しい巻紙を取り出した。坂田が大きく息を吐くと、芯のぬけた薄い煙が力なく流れた。背骨の浮きあがった背中には小さい玉の汗が浮かびあがっていた。

坂田は同じように数本ジョイントを巻いた。金髪女性のおま

るい体が現れるころには、すっかり成分は全身をめぐり、見えるものは神々（こつこつ）しく、聞こえる音はイメージをふくんできた。

坂田はやることを終え、思い出しように銀色のコップを手にとつて口につけた。チャイはぬるかつた。それだけでなく、味はうすく、甘さも中途半端で、低脂肪牛乳にのこりかすのティーパックで煮だしたのではないかと坂田は思った。屋台で飲むような、ジンジャー入りのあまからいチャイが飲みたかつたが、しかし、それでもおいしく感じられた。

坂田は首に巻いたタオルで顔をふき、枕元に積まれたマンガを手にとつて、あおむけになつて読みはじめた。体についた汗はしわだらけのシーツに吸いとられた。

三十分ぐらいすると玉子焼きとトーストの朝食が部屋に運ばれた。坂田は味気のない玉子焼きをいそいで食べ、パサパサのトーストをチャイで流しこんだ。昨日も、一昨日も同じ朝食のメニューを食べ、坂田はとつくに朝食に飽きていた。それでも、外に食べに行く手間が省けたので、なんの文句もなかった。

ベッドに寝ころがり、再びマンガを読もうとすると、眉毛の濃い、体格のしっかりした男がのそつと部屋に入ってきた。

「おはよう、坂田君、どう？ あつちで朝のボンしない？」

「おはよう川内さん、ああ、いいね、さっきジョイントを巻いたところだ。ガツツリとボンしようか」

「桜井もさつき起きたばかりだから」

坂田はマンガを積み重ねたうえに置き、座卓にころがった四本のジョイントを持ち、サンダルを履いて外に出た。

坂田の泊まっている部屋は三階にあり、中庭につづく廊下に面していた。シャワー室が隣にあり、窓はついていなかった。また、逆隣にも部屋があり、スキンヘッドの中年男性が泊まっていた。中庭の中央付近には木のダイニングテーブルが置かれ、六人ほどで囲むことができた。テーブルの前にはドミトリーの部屋があり、壁には棚が置かれてミニコンポが設置されていた。大部屋には若い男が二人泊まっていた。

坂田と川内は向かいあってテーブルについた。テーブルのうえにはタバコの吸殻がつまった石の灰皿とトタンの灰皿があり、黄色がかった竹の腹にアルミの管がささった水パイプと、赤茶色のチラムが置いてあった。また、そのそばのココナッツの欠片かけらには茶色い大麻のくずがこんもり盛られていた。

坂田はジョイントをテーブルのうえに投げ、肩にかかる黒髪を手に束ねて黒いゴムで結ゆわいた。やせ細った長い首が目立ち、あごがとがって頬ほおがこけていたが、眼は大きく、力強さがあった。

川内はココナッツの欠片から大麻を太い指でつまみ、水パイプの管に押しこんでいた。白いタンクトップ姿の川内は細すぎず、太すぎずという筋肉質の立派な体をしていて、それにみあった頑丈なあごを持ち、短い髪の毛がとても男らしく似合っていた。

「おはようございます」

大部屋から上半身裸のもやしが出てきた。もやしは狐のように細い眼をこすっていた。もやしは桜井といい、カールのかかった髪と

背中一面に彫られたトライバル模様のタトゥーが曲線を描いていた。また、背中も丸まっていた。

「おお、おはよう。おいおい、なんだよその顔、ずいぶんとしまりが無いじゃねえか」

坂田はうすら笑いを浮かべて言った。

「ええ、頭がぼーっとしてますよ、だって、寝たの遅かったですから。でも、坂田君だつてずいぶんとみつともない顔してますよ、もうボンしたんですか？ 眼がカエルになってますよ」

「みつともないのはおまえだろう？ 一筆書きしたような野狐の眼しやがって」

「うるさいですよ。両生類に比べりゃマシです」

「まあまあ、とりあえずボンしようじゃない。ほら、座りなよ」

川内は茶色のイスをひいて言った。桜井はイスに腰かけ、背もたれによりかかって大きくあくびをした。

「ぼくが哺乳類の狐の眼で、坂田君が両性類のカエルの眼、川内さんはなんだろうな？ トロンとしたやさしい眼をしているから、象の眼かな？」

「いやいや、桜井、それはほめすぎだつて。川内さんは昆虫だよ。ほら、よく見てみ、眼のうえにブットイ毛虫がはりついているじゃねえか。さわったら全身かぶれちまうようなヤツがさ」

「ははははは、そりゃそうですね！ すいません、見慣れすぎて見えなかったですよ」

「なに言ってる！ 立派な眉毛じゃないか！」

「おい、桜井、川内さんの眉毛さわってみるよ、いい経験ができるぞ。川内さんはな、おだやかでおおらかな人だけどよ、眉毛だけに毒をもっているんだ。さわってみるよ、かゆみでぶつとべるぞ」

「イヤですよ！ 坂田君さわってください。かゆみでとべるほど変態じゃありませんから」

「おいおい、二人ともおれの眉毛に触りたいのか？ なら遠慮するな、ほら」

川内は桜井のかぼそい腕をつかみ、ひっぱって顔にちかづけた。桜井の体はぐんぐんともっていかれ、桜井の手の甲に硬い毛がつきささった。

「イテー！」桜井は大声をあげて腕を振りはらうと、竹の水パイプを倒してしまい、鼻をつく茶色い水と大麻のくずがテーブルにこぼれた。

「おい！ バカ桜井！」坂田が笑いながら声を出した。

「だって、川内さんが」

「ははは、眉毛をバカにしたバチがあたったんだ」川内は誇らしげに言った。

「バチって、川内さんの 大麻じゃん！」

「そうですね、なに言ってるんですか。まったく、水パイプは倒れるは、ぼくの手はかぶれるわ、朝からさんざんですよ。もう、川内さん、変なことしないでくださいよ」

「おまえの手はどうだっかっていいんだよ。それよりも川内さんの大麻がこぼれたじゃねえか。おまえ、川内さんに謝れよ」

「まあ、大麻はいい、まだ大量にあるしな。それよりもボンしようじゃない」

「ああ、そうだ」坂田はそう言い、一本のジョイントに火をつけた。

「坂田君、そのジョイントにタバコ混ぜってます？ 混ぜていたらぼく吸いませんよ、混ぜていたら自分のジョイント吸います」

「わがままなヤツだな、だいじょうだよ、今日は入れていない」

「ああ、よかった」

坂田はジョイントを二三度大きく吸いこみ、左にいる桜井にわたした。桜井はうれしそうにジョイントに口をつけ、細い目をめいめいっぱい開いて吸いこんだ。ジョイントはジリジリと燃え広がった。坂田は口をふくらませて息を止めていた。

桜井は川内にジョイントをわたした。川内は静かにジョイントの先を数回光らせた。やわらかい煙がいくつもただよっては、ぼやけていった。

川内は腕をのばして正面の坂田にジョイントをわたした。坂田はジョイントを受けとり、石の灰皿のうえでジョイントをかるく中指で叩くと、先端の白い灰はかたまつたままポトリと落ちた。坂田は止めていた息をふうーっと吐くと、宙を浮いていた煙はたちまち吹きとんだ。坂田は次の息継ぎでジョイントを吸いこんだ。

「ウツ、ウツ、ブホンツ！　ゴホツ！　ゴホツ！　ウゴホツ！　ゴホツ！」

坂田は煙とともに激しく咳きこみ、胃の中の生ぬるいチャイを吐き出しそうになった。のどが焼けつくようにヒリヒリとして、息を吸う間もなく地面に向かって咳をづつけた。

「ははは！　坂田君、がつつきすぎだ」川内はあわい煙をだしながらのろまな口調で言った。

「軟弱ですね！　坂田君、肺が弱すぎですよ」

「う、ぶるせー」

坂田は咳きこんだままジョイントを持つ手に注意して、桜井にわたした。褐色に焼けた上半身は急激に汗がにじみだし、頭がカーツと熱くなった。眼には涙がうかび、耳がキーンとした。

「グフオツ！　グホツ！　グホツ！」

桜井は弱々しく咳きこんだ。しかし、坂田ほど体を揺らすことなく、首からうえを動かすていどだった。

「おめーも咳きこんでじゃねーか」

「ぼくはワザとですよ。坂田君みたいに胃をぶちまけるほど真剣になっちゃいませんよ。ほら、むせたほうが、ガツンとくるじゃないですか？ だから、わざとむせるように吸ったんですよ。ぼくの肺は北海道産ですから、自由自在なんですよ」

「きもちわりーヤツだな。『ぼく、わざとむせました』だと？ おまえはふざけてる！ 大麻をバカにしている！ おまえな、大麻は頭で吸うもんじゃねーぞ、体で吸うもんなんだよ」坂田はしゃがれ気味の声で、憎々（にくにく）しげに言った。

「バカにするもなにも、大麻は大麻じゃないですか。ぼくは坂田君みたいな、宗教じみた考えや、大麻吸引哲学はもちあわせていません。どうやって吸おうが、人の勝手じゃないですか。それに、頭で吸おうが体で吸おうが、口で煙を吸って肺で吸収するだけじゃないですか」

「おいおい、おれは複式呼吸だから腹と背中では吸収しているぞ。それに吐くときはロングトーンを意識しているぞ」川内はあごをしゃくって言った。

「川内さん！ ジョイントはクラリネットじゃないですよ！」桜井はすぐに反応した。

「はっはっはっ！ 川内さんは体使いすぎだよ」

「桜井、おれはクラリネットじゃなくてオーボエだぞ！ そこ間違えるなよ」

「どっちだっていいですよ！ ジョイントを楽器にみたてないでく

ださい」

「じゃあ、おれはトロンボーンだ！ 川内さんが高音の木管なら、おれは低音の金管であわせるよ。こうやって、ジョイントを前後にスライドさせて煙を吐き出してやる」

坂田は左手を口にあて、右手を前後に動かした。

「おお、それいいな！ だけどホルンのほうがおれはいいと思うぞ」

「川内さん、ホルンは丸まっているよ。ジョイントが折れ曲がっちゃう。トロンボーンのほうがジョイント向きだよ」

坂田は両腕で宙を囲って、大きな輪を作った。

「たしかに」川内は腕を組んで、三度うなずいた。

「じゃあ、ぼくは？ ぼくは？ ぼくはなににしようかな」桜井はえくぼをつかべて、おどけて言った。

「おまえはトライアングルだよ。淡白で冷たい頭のおまえにはピツタリの楽器じゃねえか」

「管楽器がイイです！ そんな、はじっこでチンチン鳴らす、みっそかすのような楽器イヤですよ！」

桜井は左手をうえにあげ、右手に持ったジョイントで叩くように横へ何度も振った。

「おい、桜井、トライアングルをバカにするな！ あれほどシンブ

ルで澄んだ音色はないんだぞ！」川内は多少の怒りをふくんだ真剣な顔つきで言った。

「はっはっはっ！」坂田は顔をうしろへそらしながら笑った。

「いや、川内さん、ぼくはそんなつもりで言ったんじゃないんですよ。呼吸を使う楽器がイイだけです。勘違いしないでください。そんな、バカになんかしちやいませんよ」

「じゃあ、あれでいいじゃねえか、なんだっけ、あれ、川内さん、口元でビヨンビヨンするやつ、あれなんて名前だっけ？」

坂田は口元で人差し指を前後に動かした。

「口琴「くしんか？」

「そうそう、それ、貧乏旅行者必需の三種の神器、口琴でいいじゃねえか、なあ桜井、あれなら呼吸を使うぜ？」

「でも、あれ、ビヨンビヨンじゃないですか、それに、ジョイントの形から離れていきますよ」

桜井は顔をわずかに顔をしかめて言った。

「おい！ 桜井！」川内はスタッカートのきいた声を出した。

「いやいや、川内さん、なんでもないです、文句ないですよ。ははは、口琴だ、とっつてもうれいな、はははは」

桜井は顔をひきつらせて、調子のはずれた声をだした。

「おお、よかつたじゃねえか桜井、楽器が決まってよ。それによ、口琴が一番大麻と相性よさそうじゃねか、なあ？」

「まあ、そう言われるとそうですね。ちなみに三種の神器って、ほかはなんですか？」

「ほかか？　ほかはな、パチカと竹笛だよ」

「ああ、なるほど！」

「ジャンベは入らないのか？」

「あれは、でかいから手軽じゃないじゃん。タブラーやシタールクラスの物でもないから、ジャンベは中途半端だよ」

「たしかに中途半端だ」

「じゃあ、これからは、ぼくが口琴で、坂田君はトロンボーン、川内さんはオーボエってことですね」

「ああ、そういうことだ、これからは意識して吸うんだぞ？」坂田はえらそうに言った。

「おい、桜井、ジョイントが止まっているぞ！」

「あつ、川内さん、すいません」

二

坂田の巻いた四本のジョイントはまたたくまに煙となり、三人の体に染みこまれた。三人の目は腫^はれぼつたくふくれ、白目は紅しうが色に染まり、なんともだらしない目つきをしていた。口元を張っていた糸はすっかりやわらかいゴムになり、締まることのない笑みをうかべて、緊張のない精神を顔に表していた。

「いやー、それにしても、今日も、暑い！」

坂田はうすら笑いを浮かべて、誰に話すでもなく、頭上をみあげて言った。

「まったくですよ。インドの太陽はやさしくありませんね」

桜井は背もたれによりかかりながら、狐よりも細い目をして坂田を見た。

「おれの部屋は窓がないからサウナだぜ？ それも、湿気たつぷりじゃなくて、カラッカラだぞ。小さい扇風機があるけどよ、熱風をまわすだけでなんの気休めにもなりやしねえ、外の日なたのほうが涼しいからおかしなもんよ。おかげで大麻はスカスカに乾燥するし、ぬるいチャイの温度は保たれちまう」

「それはいいことじゃないですか！ よぶんな脂肪をおとせて身が軽くなりますよ」

「バカいえ！ これ以上軽くなってどうすんだ！ おれはな、ただでさえ栄養失調気味なんだぞ？」

坂田は二人に納得させるように、皮のはりついたあばら骨をトンと指さした。

「たしかに坂田君はひどいガリガリようだな」

川内はココナッツに盛られた大麻をいじりながら言った。

「ほんとですよ、色が黒くて線が細いから、安い大麻にまざった小枝のようですよ」

「黒い傷の入った豆もやしに言われたかねえよ」

坂田がそう言うのと、階段からふっくらしたインド人の男があがり、三人のいるテーブルに近づいてきた。インド人はタメルといい、三人が泊まっている宿、アジヤンタのオーナーだった。耳にかからない黒髪のタメルは、濃いひげを鼻下にはりつけ、精力あふれる白い目で気品のある顔をしていた。いっけん怖そうに見える風貌だが、人情あふれる微笑みをかならず浮かべていたので、近づきがたい恐怖よりも、安心して信頼できる印象を与えていた。眼と同様に真っ白なえり付きのシャツを着ていて、ズボンは紺のスラックス、そして、丸々と肥えた大きな腹がタメルの豊かさを何よりもよくあらわしていた。

「オハヨウ！ キヨウハナニタベル！」

タメルは頭の芯まで響く声をだした。とりわけ声が大きいわけ

はなく、人に伝えたいことを届かせるコツを知っているようだった。宿泊客に夕食のメニューを尋ねるのが、タメルの毎日の仕事の一つだった。

「ああ、おはようタメルさん」

坂田はだらしない顔に、むりやり笑顔をつかべて言った。

「おはようございます、ぼくはねえ、今日はカレーを食べます」

桜井はタメルの白い目を見て言った。タメルの白目の面積は、桜井の二十倍以上ありそうだった。

「アナタカレーネ！」

タメルは首をかしげて言った。

「チャーハンおねがいます」

川内は充血した目で、まじめな顔して言った。それがやけに不自然だった。

「アナタチャーハンネ！ アナタハ？」

「えっと、どうしようかな、あれ、おれもチャーハンで」

「アナタモチヤーハンネ！ ホカハ？ イラナイ？ ホラ、アナタたち、ボンシテルデシヨ？ ゴゼンノデザート、タマゴプリンハタバナイノ？」

タメルは怪しささえおぼえる、魅惑の笑顔をつかべて言った。

「あああ、ぼくプリンたべる！」桜井はしおれたわき毛をさらし、腕を真つすぐにあげて言った。

「アナタタベルネ？ ホカハ？ アナタタチハ、タベナイノ？ イツコタベタラサンコタベルヨ！」

タメルの黒い肌につかぶ白い目と白い歯が、インドのぎらついた太陽に光った。

「ああ、おねがいます」川内は気がぬけたように言った。

「タメルさんずるいよ、そうやって小銭をむしりとるんだから」

坂田は分別のない笑いをうかべて言った。

「ナニイウノ、タマゴプリンオイシイデシヨ？ イチニチイツコ、タマゴプリンネ！ アナタモタベルネ？」

タメルは白い目をクリクリさせて言った。

「わかったよ、おれも食べるよ。それから、夕飯に鶏の唐揚げもつけてよ」

「カラアゲネ、ホカハイル？」

タメルはやわらかく首をかしげて言った。

「坂田君やせすぎだから、もっとたのんだほうがいいですよ、ねえ、

タメルさん？　ぼくは天ぷらおねがいます」

「オーケー、テンプラネ。ソウネ、チョットヤセスギヨ、マルデ、リキシヤマンネ、モットタマゴプリン、タベタハウガイイネ」

「いや、だめだってタメルさん、もうっいいって」

坂田は頭と手を振りながら言った。

「タメルさん、あと、魚おねがいます」

川内はニヤニヤしながら言った。

「アナタサカナネ、オーケー！」

「ねえ、タメルさん、そのふっくらしたおなかはどうすればなるんだい？」

坂田はタメルの突きでた腹をうれしそうにさわって言った。

「コレネ？　コレハ、タマゴプリンネ！　ナガイジカンカケテツクツタヨ！　アナタタチハマダマダアマイネ！」

タメルは腹をさすってさらに笑顔を浮かべていった。

「ジャア、タマゴプリンモツテクルヨ、アトデネ！」

「あつ、タメルさん、水パイプこぼしちゃったから、なんかふく物ないですか？」

桜井は同情をひくようにタメルの顔を見あげ、テーブルを指さして言った。

「オーケー、オーケー、スグモツテクルネ。デモ、キヲツケテボンシテヨ」

「わかりました、タメルさん。もうこぼしませんから」

タメルはテーブルを離れて、スキンヘッドが泊まっている部屋に入っていった。桜井は竹の水パイプを持って席を立ち、階段のそばにある洗い場へ歩いていった。

「それにしても、タメルさんは恐ろしいな、あの人が来るとふところぐあいを忘れちゃうよ」坂田はさきほどからのだらしない笑いを浮かべたまま言った。

「まったくだ。気がつく前に料理の注文をしている」

川内はうなずいて言った。

「そういえば、川内さんはこの宿に来て何日になるんだい？」

坂田はテーブルに肘をついて言った。

「忘れた。いつだったけ？ あっという間に日が過ぎていくからな、たしか、いつだ？ わからないな。けど、一ヶ月は過ぎているんじゃないかな」

「一ヶ月か、おい！ 桜井、おまえはどのくらいだ？」

坂田は横を向き、腰をかがめてパイプを洗っている、タトゥーのはいった背中にむかつて声を出した。

「今日で三週間です」

桜井は振りかえらずに、高い声を大きくして言った。

「二人とも長いな、すっかり沈没しかけているじゃん」

「坂田君は来て何日だっけ？ まだ来たばかりだったはずだ」

川内はのべーっとした表情を変えずに言った。

「おれ？ おれは、たしか、四日だよ」

「いや、違います、坂田君はもう六日目になりますよ。ぼくが大麻を仕入れた日に来たんですから、はっきりと覚えています」

桜井がテーブルへ歩きながら言った。

「おいおい、坂田君、うそはいけない」

「あれ？ そうか？ まだ四日ぐらいな気がするけどよ」「坂田はうかない顔をした。

「それがこの宿の魔法なんですよ、坂田君、本人が気がつくまえに走って日が過ぎていくから、わからなくなるんですよ。ぼくもこの宿に来て、一週間が過ぎたぐらいに気がつきましたよ。だから、一週間ごとに大麻を仕入れるようにして、泊まっている日数が混乱しないように防いでいるんです。そうしないと、ずるずるひきこまれ

ていきますからね」

「まめな男だな」川内は感心したようすで言った。

「だって、それぐらいしないと、川内さんみたいに宿の魔法にどっぷりとつかって、気がついたら身も心も宿と同化していた。そんなことになりかねないですからね。そもそも、ぼくは沈没しに海外に来たわけじゃないんですから、将来の投資のために、大麻を吸って見聞を広めにきたんですよ」

桜井はイスに座って思い出したように言った。

「そいつあいい心がけじゃんか、でもよ、おまえ、三週間泊まっているなら川内さんのことは言えねえぞ。まだ、四日目のおれならまだしも」

「なに言ってるんですか、六日目ですよ、坂田君の時間間隔が狂いはじめている立派な証拠ですよ。それにね、坂田君、ぼくが宿に来た時も、川内さんは一ヶ月ぐらいだって言っていたんですよ」

「なにっ？ おれはそんなことを言っていたのか？」

川内は本当に驚いたようすで言った。

「川内さん、あんたがうそついているじゃねえか。なに言ってんだよ」

「違いますよ、坂田君、川内さんはうそをついてないです。ほんとに、一ヶ月ぐらいだと思っただけですよ」

「スグ、プリンモツテクルヨ！」

タメルが部屋から早足で出てきて、笑顔を浮かべたまま階段を下りていった。

「ああ、お願いしまーす」桜井はふりむいて言った。

「そうか、おれは一ヶ月前もおなじようなことを言っていたのか」

川内は問いかけるようなまなざしで桜井を見た。

「そのようすだと、二ヶ月前もおなじこと言ってそうだな」坂田はぼそつと言った。

「そうですね、川内さんは足どころか、頭まで宿に食われかかっていますから」

桜井は静かにうなずき、冷静な口調で言った。

「まあ、そんなこと、どうでもいいじゃない。ボンして忘れてしまおう！」

川内はいきなり水パイプを手にとり、タンクトップのすそでアルミの管についた水分をふきとった。白いタンクトップは茶色くじんだ。

「そりゃそうだ！ とりあえずボンしよう！ そうすりゃ、川内さんの頭に煙がまわって調子がでてくるだろう」

坂田は顔をくしゃくしゃに大笑いして、バカにしたように適当な

口調で言った。

「ああ、そうだ、いつから泊まっているか、きつと、思いだすぞ。思い出してみせるぞ！」

川内は野太いおたけびをあげ、ラツパ型の管の先端をライターでかるくあぶった。

「これだから忘れるんですよ。まあ、覚えていたからって時間が戻るわけじゃないですが」

「いや、戻るかもしれない、ほら、桜井、おまえもこの宿に来て三週間になるんだ、一階の書庫で『火の鳥』を借りただろっ？」

川内はココナツツの欠片かけらから大麻をなぶるようにつまみ、強引に管の先端につめた。大麻のくずが濡れたテーブルのうえにばらばらと落ちた。

「ええ、もちろん、全巻借りて読みましたよ」

「坂田君は読んだか？」

「ちょうど、今借りて読んでいるところだよ。それがどうした？」

「なら、話は早い、ほら、あれ、『太陽編』は読んだか？」

「えっ？ 『太陽編』ってどんなんでしたっけ？」

「おい、あれだよ、狼の顔したやつが出てくる話だ」

「ちがう！ それじゃない！」

川内は両手を振って否定した。

「えっ？ 違うのか？ いや、あってるはずだぜ、だってよ、さっきまで読んでいたんだ」

「なんです？ 坂田君、知ったかぶりですか？ ソクラテスに叱しかられますよ」

「ばかやろう！ そんなやつ知るか！ 川内さん、『太陽編』は狼だって、ほら、つらの皮をはがされた話だ、間違いないって」

「そうか？ 尼あまさんが羽を振って、妖怪の怪我を治す話じゃないのか？」

「ああ、あれですか！ ぼく覚えています。川内さん、違いますよ、あれは『復活編』ですよ！」

「てめえが知ったかぶりじゃねえか！ 尼さんが出てくるのは『異形編』だよ。『太陽編』でも出てくるが、ほんのわずかだ。なあ、川内さん『異形編』じゃないのか？」

「ああ、それだ、それ、それだよ、それでな。なんだっけ？ なんの話をしていたんだ？」

「川内さん！ 覚えていてくれよ！ あれだよ、あれ、あれ？ なんだっけ？ おい、桜井、なんの話をしていたか覚えているか？」

「いいえ、狼の顔までは覚えています。でも、なんでしたっけ？」

なんで狼の顔がでてきたんですって？ ちょっと、順を追って思い出してみましょーう」

「じゃあ、わかりやすい、竹の水パイプから話を思いだそうぜ。ほら、川内さんが水パイプに大麻をねじこんでいたとき、どんな話をしていた？」

「いや、覚えていない」

「ああ、川内さんはだいたいじょうぶだ。まったくあてにしていないから、安心して話を思い出すのに集中してくれ」

「たしか、タメルさんがプリンを持ってくると言っただけを下りて行きましたよ」

「タメルさんがプリンか、タメルさんはなんでプリンを持ってくるんだ？」

「坂田君がやせすぎているからだ」

「いや、川内さん、黙っていてくれ」

「坂田君、プリンはたぶん関係ないですよ。プリンを考えると、タメルさんの立派な腹が邪魔して思い出せません」

「そうだな、悪かった、関係ないプリンを注文してよ。じゃねえよ！ ボンしようって話じゃねえか！」

「ああ、そうだ！ ボンするためにおれは大麻をつめたんだ」

「そついや、そつですね、ついつい話に夢中になって、すっかりボ
ンするのを忘れてましたね」

「じゃあボンするか！」

「ああ、川内さん、忘れないうちにとつと火をつけてくれ」

「タマゴプリンモツテキタヨ！ ホラ、テーブルファイテネ」

陽気な声と共にタメルが現れ、汚れた雑巾ぞつぎんを桜井に手わたした。
左手に持った木のおぼんのうえには、扇形に切られたプリンが白い
皿に三個のっかっており、こげ茶色のカラメルあたまがプルプルと
揺れていた。

坂田は埃ほこりっぽい黄土の道を歩いていた。今泊まっている宿、アジヤンタに来てからというもの、坂田は昼食を食べるか大麻を買いに行くしか外に出ておらず、外出したのは今日で四回目だった。たいていは大麻を吸ってマンガを読み、タメルが夕食のメニューを聞きにくるとき、ついでに昼食をたのんでいた。むしろ、坂田の気づくことのない技術で注文するように誘導されていた。そして、マンガに飽きたら宿にいる日本人達と大麻を吸ってはたわいもない話をし、再びマンガを読んだ。それだけで坂田の一日は終わっていた。

というのも、アジヤンタは朝晩の二食付きで、一日に三回チャイが用意された。朝食のメニューは決まっていたが、夕食はカレーやチャーハン、オムライス、おかゆなどから選ぶことができ、また、サイドメニューで焼き魚、刺身、マリネ、天ぷら、ロブスターなどを注文することができた。それに、インターネット接続のパソコンが完備され、一階の図書室には膨ぼう大な量の本とマンガがそろえられていた。これで宿代が安いときたものだから、多くの貧乏旅行者は感嘆かんとんの声をあげ、喜んでアジヤンタに沈んでいくのだった。

あとは、大麻が販売されていたら完璧だと坂田は思っていたが、さすがに大麻は用意されていなかった。連日吸いつづけているせいで大麻は砂時計のように減り、坂田の持っている大麻は一グラムもなかった。今読んでいる途中の『火の鳥』を終えたら、次は『アドルフに告ぐ』を読もうと思っていたので、そのための準備として大麻を買いに外へ出たのだ。読んでいる途中で大麻がなくなるのは、

考えただけでマンガを壁にたたきつけたくなるほど、坂田にとって我慢できないことだった。

坂田は大麻を買いに行くついでに、歩いて十分ほどの海へ行くことにした。海は好きでも嫌いでもなく、むしろなんの関心もなかったのだが、桜井が、「このビーチはすばらしくきれいですよ！」とうれしそうに言っていたのを思いだし、坂田はなんとなく寄ってみようと思った。さすがにマンガばかり読んでいたので、ほんのすこしだけ観光客らしい好奇心を取り戻していた。

容赦ない太陽は頂点にさしかかるまえで、朝方の気温をさらに燃えあがらす直射日光が坂田の体をまっすぐに照りつけた。歩いて二分もしないうちに、坂田は海へ向かったことを後悔した。“カンナビス”と白いアルファベットがプリントされたTシャツは汗ばみ、あせた黒い背中には斑点が浮きあがり、点が結びついて広がっていた。坂田は友人達からもらったTシャツをたいへん気に入っていたが、今このTシャツを着ていることに腹が立った。さすがに誕生日プレゼントらしく、生地はしっかりと安っぽさはないが、バンコクの露店で売られている物に比べるとわずかに重みがあった。

坂田は他に三枚のTシャツを持っていた。一枚はベージュにブルース・リーのヌンチャク姿がプリントされ、もう一枚は群青色ぐんせいしきにチェ・ゲバラの顔、三枚目は白に赤い十字のロゴが大きくはいつていた。人物の顔がプリントされたTシャツはタイで購入したが、赤字のシャツはもらい物だった。それはラオス北部の街、ルアンパバーンで献血をした時にもらったもので、生地は薄っぺらく、ところどころに虫食いのような穴があいていた。坂田は赤十字のTシャツを着てくれば良かったと思い、友人達の思い出のTシャツは今ではなんの感傷も持たなかった。

日光に水分を奪われた砂利道を歩きつづけると、前方に連なつた長屋が見えてきた。坂田はすぐにビーチへたどり着くと思つていたので、もしかしたら道を間違えたのではないかと疑つた。だが、地面が土っぽい砂に変わつていることにすぐ気がつき、海に向かつていることがわかつた。

砂のうえに小道をつくつている両端の長屋は、都市の川沿いや線路沿いに見られるあばら家で形成され、木やトタンなどの材料をノリでつなぎ合わせたように組み立てられていた。それはインドの混沌とした世界、複雑な階級制度をまざまざと証明しているようだった。坂田はそういつた最下層の人々が生活する場所を遠目で見たことはあつたが、じつさいになかを通り過ぎたことはなかつた。坂田は正直言つて長屋で形成された村を通りたくなかつたが、かといつて、引き返すという軟弱な行為はしたくなかつた。

村には多くのインド人が生活しており、家の前で魚を干ほしている者がいれば、漁に使う網をなにやらいじつている者もいた。また、褐色かつしよくの裸でたわむれる子供の集団や、頭に荷物を乗せて歩く汚れたサリー姿の女性達、短いズボンから枝のような長い足が伸びた少年達がいた。長屋を歩いていて、坂田は息がつまりそうだった。そこは日本ではけつして見ることもない異質な世界が広がつていた。家々はさびれていたが、それに反して人の数はむだに多く、みな元気で陽気にみえた。

坂田は周囲を観察しながら歩いた。「いったいなんだここは？」と繰り返しつつ歩いた。最下層の人々の生活に興味があるわけではないが、落下した物は下に落ちていく自然の法則のように、否応なしに目をひきつけられた。また、それにこたえるように、ほぼ全員全員のインド人が大きな白い眼で坂田の姿を凝視した。

坂田は朝から大麻を吸いつづけていたおかげで、頭はすっかりぼけてしまい、冷静な思考能力が著しく低下していた。「おれは動く見世物小屋じゃねえぞ！」と思ったが、そんな叫びはインドで何度も繰り返して、結局、見世物であることを受け入れざるうえなかつた。坂田はそれを知っていたので、自己本位な考えを頭からすくりに捨てた。インドはしつこい国だと坂田はすでに学んでいた。

だが、長屋は迷路のように入り組んでいて、なかなか目指す海は見えてこなかった。坂田は頭ではインド人をすこし理解していたが、感情はインド人に対して単純な反応をしめしていた。白い目から浴びせられる磁場をもった視線は、坂田の機嫌に水をたしていった。また、灼熱の太陽が坂田を熱くさせた。

坂田はやむことのない白い目に敵意をむきだして睨みつけ、胸を変につきだして堂々と歩いた。量産された白い目は前方から横に流れ、後方からも感じられた。

「ハロー」

家の前に立っていた青年が坂田に声をかけた。

「うるせー！」

坂田は低い声でむやみに反応した。青年は大きい目を開き、首を横にかしげて陽気に笑った。

「へロー、へロー」

裸の子供が無邪気な笑顔を浮かべたまま、坂田のうしろから声をだした。

「うるせー！」

坂田は歩みをとめずにうしろをふりかえり、目線を下にやって言った。子供はキャツキャと笑い声をあげた。

坂田は気にせず歩きつづけた。坂田のうしろには数人の子供が一緒に歩いて歩いて、海へ向かう勇敢で滑稽なパーティーが出来あがっていた。先頭の男は顔をしかめて注意を払い、しっかりとした足取りで進んでいたが、後方の小粒達はおちつかず、動きまわりながらついていった。

「おい、クソガキども、うるせーぞ！ 何もでねえからついてくんな！」

坂田はうしろからついてくる子供達に向かつて、ぶっきらぼうに言った。もちろん坂田は日本語しか話せなかった。子供たちは健全な喜びの声をあげながら、散るよううしろへ走り、砂をけりあげていった。

「ったくよ、これだからガキは」

「ハロー」右手で頭の荷物を支えたまま、骨の細い若い女性が前から声をかけた。

「ハ、ハロー」

急に声をかけられた坂田は、つぶれた不完全な笑顔をうかべて声をだした。唇はうすく、鼻筋がしゃんとした女性は横を通りすぎ、坂田は足を止めてふりかえった。赤いブラウスのしたにはほっそり

した褐色のくびれがながれ、黄色いサリーの腰元はなまめかしく、優雅にゆれていた。女性は歩きながらふりかえり、艶やかな瞳で坂田の顔を見て、にっこりと微笑みをつかべ、再び前を向いた。その横から小さな子供達が走って坂田に近づき、声をあげ、再びうしろへドタバタと走っていった。

長屋の迷路を抜けると、らくだ色の砂浜が広がっていた。坂田は砂浜を眺めてあぜんとしていた。桜井が言うような、“すばらしくきれいなビーチ”はどこにもみあたらなかった。高いヤシの木が並び青い芝がみずみずしい、静かな風景はなく、小ささまざまなインド人がそこらじゅうでうろつく、喧騒な砂浜があった。赤や緑、青のまじった色の濃い漁船が砂の上に並び、腰をかがめて魚を仕分けしている者がたくさんいた。また、砂の上に寝転がっている者もいた。なによりも、木の棒を持ってクリケットをしているインド人達が坂田の目をひいた。

「あいつ、どこがすばらしんだよ！」

坂田はあきれはてて、笑い声さえあがらなかった。というのも、砂浜には人糞がいたるところにおちていて、潮の香りと魚の腐った臭いが混ざって異様な臭気が漂っていた。じっさい、それほど臭くはなかったのかもしれないが、目の前の風景だけでじゅうぶん臭いそうだった。

坂田は足元を気をつけて、海へ近づいた。透きとおるような海水はなく、白い波がドミノ倒しに走り、蒼くにこった海水が泡をふいていた。「もしかしたら海に入れるかも」と、心の奥でわずかに期待していたのだが、坂田は海水に足をつける気にもならなかった。人糞が海水に溶けていて、足にこびりつくのではないかと思うと、おもわず胃の中身を吐き出しそうになった。

坂田は大麻を買いに行くことにして、砂浜を歩いた。坂田は歩きながら夏の江ノ島を思い出し、あの海岸がともきれいに感じた。この砂浜は江ノ島のように人がいてうるさかったが、やけに生活感があふれていた。ゲーム性のないビーチバレーに興じる水着すがたの若い男女はおらず、褐色の少年達が純粹な声をあげ、素っ裸でクリケットを楽しんでいた。

四

坂田は村から離れるようにビーチを適当に歩いてから、土の道を歩いていた。まわりは建物がすくなかったが、村に比べると立派な民家が点々としていた。坂田の泊まっている宿、アジャンタへつづく一本の通り沿いに大麻の売っている小屋があり、勘かんをたよりに坂田はジョイントを吸いながら歩いた。

だんだんと背の高い建物を見かけるようになり、通りに近づいているのだと思った。小道を歩いていると白い外壁の宿があり、その外観をぼんやり眺めていると、二階のベランダの手すりにモジャモジャ頭の日本人の男がいた。男は両腕を手すりにのせて、うつろな目で坂田の顔を見た。

「こんにちは」男は覇は気のない声で言った。

「こんにちは」坂田はふてぶてしい態度で言った。坂田は歩き疲れていたので、機嫌が悪かった。さらに、桜井にたいしての怒りがたまっていた。

「どうです？ 一服していきませんか？」

「ええ、それは良いですね。遠慮なくいただきますよ」

「その階段を上がってきてください」

坂田は敷地内に入り、やけに白い階段を上った。

階段を上りきると、背の低い男が立っていった。坂田よりも頭一個分低い男は、丸い顔をしていて、インドにいる日本人にしては肌が白かった。ただ、顔半分をおおうひげと、背仲までつながっているうなじの毛を見ると、童顔ともいえる顔が気味悪く見えた。それに、男は赤いきびがいくつもあり、とくに左ほほに大きくふくらんだひとつは、膿がたまっていて、すこしふれただけで破けそうだった。

「あそこで吸いましょう」

男は口元をもぞもぞさせて、ブランダの端にある水色のテーブルへ歩いた。男はサンダルをはいておらず、ペタペタと足の裏の皮膚がひっついて離れる音がした。

「ああ、はい」

坂田は男の歩くうしろすがたを見て、「この男はなにかに似ている」と思ったが、瞬時に思い出せなかった。坂田は考えながらうしろからついていき、テーブルと同じ素材であるプラスチックのイスに座った。

「部屋から大麻を持ってくるので、ちょっと待っていてください」

男はそう言って、ペタペタと奇怪な小動物らしく奥の廊下へ歩いていった。坂田は男の目を見ずにうなずいただけで、内容が耳には届いていないらしかった。イスの背もたれに重心をよせ、右手を আগেにそえたまま、テーブルのうえを見ているようでその先を見つめていた。

「あれはなんだっただけ？」

坂田は男に似たものを必死で思い出そうとしていた。大麻が効いた状態である坂田は、異常な集中力を発揮して深い記憶の底を探っていたが、大麻が効いた状態である坂田は、穴のあいた虫取りアミで記憶をすくっているのです、なに一つすくえておらず、ただ、すくう行為を楽しんでいるだけだった。

「いや、まてよ、まてよ、あいつはなんだけ？」

坂田はいつこうに思い出せていなかった。虫取りアミの柄えはすでにポロポロに折れかかっていた。

「おまたせしました」

男はペタペタと小走りでテーブルに戻り、左手に持っていたポリエチレンの袋をテーブルにふわっと投げ、イスに座って右手に持っていた赤いリズラの巻紙とマールポロのタバコを置いた。

「あつ！ピグモンだ！」

坂田は男の一連の動きを見てはつきりと思いだした。それは、『ウルトラマン』に出てくる小さな怪獣だった。坂田は頭を揺らして、ニヤニヤと細い口元をゆがめた。赤い目はむくんだへの字になり、髪の毛先から足の小指の爪まで笑い出しそうで、必死にこらえたが、無理な抑制によって体中がピクピクと震えだし、今にも爆発しそうだった。思い出すため思考して止まっていた体は、反発して全身でその陽気な感情を表現しようとしていたが、かろうじて残っている理性がそれをなんとかいとどめていた。

「これ、いい大麻じゃないですか！」

坂田はポリエチレンの袋を勝手につかんで、ろくに見もしないで声にだした。男に怪しまれるまえに先手を打ち、自分の体の異変から注意をそらすとした。それに、男に自分の発見をうっかり言っ
てしまいそうだった。坂田は今の喜びを、一緒に分かちあいたいという欲求にとりつかれていた。しかし、それは相手を侮辱する行為だった。

「そうでしょ？　ここらへんのガバメントショップでは売っていない、良質な大麻なんですよ」

男はマールボロの箱からタバコを一本取りだし、指先を舌でなめ、その指でタバコの腹を湿らせた。

「どつりで、はっはっはっ、ガバメントショップじゃあ、こんな大麻見かけませんでしたからね、はっはっはっ、いやー、はっはっはっ、いい大麻ですね、こんななたが吸えるなんてうれしいな！　はっはっはっはっはっはっ、スイマセン、朝からボンしていたからついうれしくなっちゃって、もう、感覚がおかしくて！　はっはっはっ、スイマセン！」

坂田は男の発言を聞いて、ふきだしそうになった。笑いの感覚はピグモンを思い出したことで狂い、過敏に反応していた。自分がうれしそうにニヤニヤしている真相を知らずに、どうでもいい質問にたいして何の疑いもみせず、まじめに答える男のすがたが滑稽こっけいに見えてしょうがなかった。だが、大麻を吸っていない通常の状態だったら、けっして笑うようなことではなかった。質問にたいして、まじめにこたえるという人間としてあたりまえの礼儀を、坂田はあた

りまえに見えずにいた。

「そうですか？ あなたも好き者ですね？ なーに、そんなに喜んでくれるなら、一服を誘ったかいはありますよ。それに、吸えばさらに良さがわかるはずですよ」

男は満足そうにタバコを横に持ち、ライターの火であぶりながら言った。

「はっはっはっはっはっ、いや、ほんと、スイマセン！ うれしくて笑いがとまらないですよ、はっはっはっ、誘ってくれてほんと、ありがとうございます」

坂田は男が大麻について話し、ジョイントに混ぜるタバコのニコチンをとばしているのを見て、さらにおかしくなった。腹はぎりぎりによじれていた。坂田は腹をすかせた人間がなにを食べてもおおいしく感じるように、男のどんな言動も最上の笑いを与えてくれた。それに、自分が笑っている真相を知らずに、うれしそうにしている男のすがたを見て、別に悪いことをしているわけじゃなく、むしろ相手が喜ぶ行為を自分はしているのだと思っていた。坂田は朝から吸いつづけていて、常識の感覚がにぶっていた。

「おれは坂田って言うんですよ、はじめまして！」

坂田はだらしない顔をピクピクさせたまま、手を前に出した。

「ぼくは林です、よろしく」

林はライターをテーブルに置き、坂田の手を握った。坂田の手は大きくて指は繊細せんさいなぐらいに細かったが、林の指はさらに細かった。

「林さん、おれ、今日はラッキーですよ、その道を通りかかってほんと良かったと思う」

「ずいぶんと大げさだね、そう思うのはまだ早いよ。ジョイントを吸ったらさらに良くなるから、もうちょっと待ってて」

坂田は林が自信ありげに言うので、袋を目の前にちかづけてまじまじと見つめた。坂田が普段吸っている大麻よりも色は緑色に染まり、湿気を多くふくんで粉をふいていた。中をあけてその臭いをかぐと、野暮やぼつたい枯れた臭においはせず、ふわつとしたやわらかな香りが鼻の粘膜をついた。坂田はニタニタとした顔から急にきりつとした顔つきに変わり、鼻の穴を開かせて何度もその香りを嗅いだ。林の持つていた大麻は、坂田が海外に来てから嗅ぐことのなかった、豊潤ほうじゆんな香りをしていた。

「林さん、こんなねた、どこで手に入れたんですか？」

坂田はあいかわらずうれしそうだったが、他人を卑下ひげしたうすら笑いをやめて、おどろきを持って林に尋ねた。

「ほら、ちよつと行くと大きな寺院があるでしょ？ あのと近くで売っているんだよ」

林は持っていた厚紙のカードをちぎって、ローチを作っていた。

「そうなんですか、いや、ほんと吸うのが楽しみですよ」

坂田はそう言って、林に袋を手わたした。

「でしょ？ 坂田君も欲しい？ 明日ちょうど買いに行こうと思っ
ていたからさあ、もし気に入ったら買ってきてあげようか？」

林は手なれたてつきで大麻をほぐしはじめた。

「いいんですか？ おねがいします！ いや、もう、この大麻なら
吸って確かめるまでもないですよ。子供を育てきった干からびたば
あさんじゃなく、温室で育てられたお嬢様まではいかなくても、自
然の中で自由奔放ほんほうに育てられた純潔な乙女の香りがしますよ。種は
ないし、しおは吹いている。元気な処女である証拠じゃないですか
！」

坂田は手ぶりをまじえ、ちからげに話した。坂田はピグモンがお
もいがけない幸運を運んできたと思っただが、すぐに林をピグモンだ
と思うことをやめようと思っただ。見知らぬ自分に一服を誘ってくれ
て、なおかつ大麻を買ってきてくれるという、林の気前の良い心に
たいして申しわけなさを覚えた。だが、林が大麻をほぐすかわい
すがたを見ると、「ピグモンが大麻をくずしている！」と思い、笑
いが再びこみあげてきた。しかし、さきほどまでの分別のない笑い
ではなく、節度をわきまえた親しみのある微笑みが顔にうかぶだけ
だった。

五

林の持っていた大麻は上等な質だった。それは、朝から吸いつづけて大麻に慣れていた坂田の体に、また一味違った新鮮な効きをもたらした。甘みが鼻につくマイルドな煙は、ぞんざいに茶色く乾燥した大麻のようないがらっぽさはなく、気管をこちよくぬけていった。肺にためているあいだも香りが体に染みこみ、脳に変化をもたらすのを具体的に感じて、ふつと息を吐き出すと成分のぬけた柔^{うわ}和な煙を楽しめた。

「林さん、この大麻、ほんといいですね。心臓の音がドクドクと聴こえますよ」

坂田は酸欠をおこしたように頭をゆらし、にごった目で林の丸い顔を見た。

「それなら良かったよ」林はどこを見ているかわからないたれきった目を細め、かすかに笑った。

「やっぱり、大麻は量より質ですね、しょぼいのをいくら吸ったところで、上質なヤツの一発にはかないませんよ。大麻にはアルコールのようなチリツモ（塵も積もれば山となる）効果は期待できませんからね、せいぜい、頭が痛くなるのがおちですから。もう、効きの鋭さがぜんぜん違いますね。ガバメントショップで買ったねたななんて、のどを痛めるだけで、まったくやさしくないので。いや、ほんとに、買う前に林さんに出会ってよかったですよ」

坂田はポリエチレンの袋を手を持ち、ゆっくりと顔の前に持ちあげた。すでに自分の手元に入ったように袋を見つめ、上質な大麻を肺一杯に吸える生活を思い浮かべて、ぶるつと武者震いをした。

「明日の昼ごろに買いに行くからさ、夕方には手に入ってるよ」

「値段はいくらですか？」

「五百ルピー」

「質のわりには安い値段ですね。林さん、おれ、今、金ないからあとで持ってきてます」

「いいよ、ぼくが立て替えておくからさ、明日取りに来るときでいいよ」

「たすかります。この状態で取りに戻るのはきびしいですから」

「坂田君はどこに泊まっているの？」

「おれですか？ アジヤンタですよ」

「ははは、アジヤンタだ、あそこに泊まっているんだ。どう？ タメルさんは元気？」

「林さんも知っているんですか？」

「ああ、ぼくも二ヶ月前まで泊まっていたんだ。あそこはある意味で、居心地がいいからね。どう？ 外に出る気がなくならない？」

「出る気もなにも、外に出る必要がないですよ。おれ、四日前にこの土地に来たんですが、一番の遠出がガバメントシヨップですよ。いや、さつき人糞じんぶんビーチに行ったな、けど、そんなもんですよ。マンガと大麻にどっぷり浸かってますよ」

「ははは、あそこのマンガと本は強烈だからね」

「もう、スンゴイですよ！ おれがアジヤンタに来た理由が、そもそもマンガですから。コルカタで会った日本人の男が、アジヤンタには『ブツダ』や『火の鳥』が置いてあるって言うから、もう、喜んで来たんですよ」

「ええ、なに？ 手塚治虫が好きなの？」

「マンガで一番好きなのは？ って聞かれたら、ダントツで『火の鳥』をあげます。あれは深いですから、読むたびに新たな発見がありますよ。林さんは読みました？」

「アジヤンタに泊まっていたんだから、もちろんだよ」

「ならわかりますよね？ あれはすばらしいですよ。だって、火の鳥全巻を三十回読破すれば、義務教育九年間で学ぶよりも、人間と世界について知ることが出来ますよ。さらに、アジヤンタには『ブツダ』と『アドルフに告ぐ』、『陽だまりの樹』もありますから、手塚漫画を読みつづけければ、勝手に人生に強くなれますよ。宿代は安くて、二食三チャイ付、なにより、大麻は遠慮なく吸っていいのですから、アジヤンタは最高ですよ」

「ははは、坂田君にぴったりだ！ そのようすなら一ヶ月はかたい

ね

「いやいや、そんなにいませんよ。マンガを読み終えたらとっとと南へ向かいます」

「ああ、そうなの？ それはいいことだ。それなら、一週間以内に出たほうがいいよ、じゃないと、どんどん沈んでいくからね」

「はっはっはっ！ 大丈夫ですよ！ あと二日で目当てのマンガは読み終わりますから」

「ぼくはあの宿に三ヶ月間いたからね、いろんな日本人を見てきたよ。たいていの旅行者は宿の心地よさにとらわれてしまい、足から侵食されて、動く気力を奪われるんだ。あそこはタメルさんという魔法使いがいるからね、小さな気づかいで組み立てられたアジャクタのサービスは、インドの宿ではありえない体験をさせてくれる。インド旅行で体力をけずられた旅行者は、『ここはほんとにインドなのか？』とうれしい悲鳴をあげて、オアシスのようなアジャクタの魔法に魅了され、骨抜きにされてしまうんだよ」

「はっはっはっ！ そうなんですか？ そう言われると、タメルさん、やけにサービスがいいですね。あれは日本人顔負けですよ」

「ほらほら、宿の扉はいつもカギがかかっているだろう？ あんな宿ぶつうある？ 外出して戻ってくるたびに、チャイムを鳴らすなんてめんどくさいっいたらありゃしない」

「たしかにダルイですよ。初めておとずれた時は早朝だったから、たまたま開いていないのだと思ったけど、あれ、一日中ですよね？」

「そうだよ、あれがアジャンタの魔法の扉だよ。あの扉を開けて一歩踏みこんだが最後、部屋の壁を埋めつくしたマンガと本、そして陽気な日本語を操る魔法使いタメルさんの餌食えじきになるんだ。目的のないひ弱な旅行者はイチコロさ！ なにせ、別名アリジゴク宿だからね」

「はっはっはっ！ たしかにあの宿危ないですよね！ じゃあ、おれは、もう餌食になっているんですかね？ はっはっはっ！」

「ああ、膝ひざまで砂にめりこみ、足首は食われているだろうね」

「イヤだー！」

「マンガと大麻に浸ひかっている時点でアウトさ！ そうそう、あそこのタマゴプリンは食べている？」

「ええ、もう、一日一個は食べてますよ」

「あああ、トドメだね、あれは大麻よりも効くマジックプリンだよ。依存性はシャブの何百倍だよ？ もう、ほっぺたがおちて宿から出られないよ、坂田君」

「今泊まっている日本人は、一日三個食べてますよ」

「いいぐあいに症状が進行しているね。その人、もうほとんど沈没しかかっているよ」

「でしようね、いつから泊まっているのか、覚えてなかったですか、じゃあ、林さんは一日に何個食べてたんですか？」

「ぼくかい？　ぼくも平均三個だったね、でも、終盤は一日五個食べていたよ」

「はっはっはっ！　それ、食いすぎですよ！　皮膚がカラメル色になりますよ！」

「いやいや、気がついたらそうなるんだって！　あれはタメルさんの魔力がつまったタマゴプリンだからね。それに、当時泊まっていた日本人が良くなかった、なにせ、一日七個食べるやつがいたから」

「もう、それはバカですよ！　バカ！　ただのバカですよ！」

「いやいやいや、坂田君、あの宿にいたらバカになるんだって！　大麻とマンガ、あとはくだらない会話、その繰り返し人間をバカにさせるんだって！　言ってしまうえばあそこは精神の牢屋だからね、外界から隔離されて常識がわからなくなるのも、しかたがないんだよ」

「ほんと、アジャンタはすばらしい宿ですね、もう、おかしくて、おかしくなって、より好きになっちゃいましたよ。それにしても、林さんはよく出られましたね？」

「さすがに三ヶ月もいると、宿に飽きてくるよ。一緒に泊まっている日本人達がうつとうしくなってさ、寝ても覚めても『ボンです！』という言葉とジョイントがまわってくるんだ。多い時で三十人くらいでボンだよ？　さすがに自分の生活に疑問を感じたよ」

「そりゃ、多すぎだって！」

「だから、一緒に旅行している相方と宿を出たんだ。もっと自由に

過ごせる、日本人のいない宿に行こうってことで」

「えっ？ 林さん、誰かと旅行しているんですか？ 相方って、女ですか？」

「地元の友達だよ。そいつが海外に行きたいみたいなお話をしていたから、ぼくが誘ったんだよ。もともと、インドで沈没する予定だったからね」

「へー、沈没目的の旅行ですか？」

「そう。もうそろそろ、この土地に来て半年になるね」

「ええっ！ ここ以外は行ってないんですか？」

「ああ、前に旅行した時にインドをまわったからね。今回は目的が違うよ」

「そうだったんですか、おれ、てっきり移動が目的だと思っていましたよ。じゃあ、アジャンタに沈没するのは別に悪いことじゃないですか」

「まあね、アジャンタで沈むのが目的だったから」

「おれ、海外に来た当初は、沈没している人が大嫌いだっただよ。なんの目的もなく、日本の生活から逃げるように海外で時間をつぶしている人達が。けど、最近は、沈没にもいろいろあるんだと気がついて、考えをあらためましたよ」

「そうなの？ 沈没はただの沈没じゃない？」

「いえ、沈没している人も様々だと気がつきました。はたから見ただけの沈没ですが、沈没の理由によつては、おれは一部の沈没を認めますよ。たとえば林さんのような沈没、まあ、理由は知りませんが、海外に来て目的が沈没だと堂々と言えるのは、なによりも大切ですからね。自分の行為を隠してごまかしていない点では立派ですから」

「ぼくはシタールをやっているから、大麻を吸って楽器を弾いていれば楽しいんだ。理由はそれだけだよ」

「おれは林さんの沈没は認めますよ、目的がありますから。けど、おれが途中で会った沈没者のなかには、くそつたれなやつがいましたよ」

「ふーん、どんな人？」

「そいつはブツダガヤにある本屋で会ったんです。おれが日本寺近くの通りを歩いていると、たまたま本屋があつて、そこで坊主頭の若い男が働いていたんです。おれは大麻を吸って本を読むのが好きなので、ちょうど、宿で一服入れたばかりでグラングランに効いていたんです。それで店に入って、どんな本が置いてあるか本棚を凝視していたんですよ。すると、坊主頭の日本人は、『チャイを飲みませんか？ 無料でさしあげますよ』とイモの顔で話しかけてきました。おれは遠慮なくいただくことにして、外のテーブルについて、本屋のむかいにある露店から運ばれたチャイを飲んでいたので、アジャンタとは違って、熱くて濃厚なチャイでしたね」

「へー、それで」

「それで、おれはふと、『本を買わずに立ち読みができるんじゃないか？ それなら金を使わずに本が読めるぞ』と思っただけですよ。さっそく坊主頭に聞いてみると、好きに読んでいいと言っただけ、おれは気になった本をテーブルで読んでいたんです」

「坂田君、せこいね」

「いや、林さん、そこは気にしないでください。それで、大麻効果である視野の狭い集中力を発揮して、夢中で本を読んでいただけですよ。そのあいだ、坊主頭は店をおとずれる観光客の相手をして、忙しそうに動いていました。本屋の隣に小さな雑貨屋があつて、その店番もかねていたんですよ。ときおり、ひまな時間をみつけていつは、『チャイは飲みますか？』と話しかけてきので、おれはなんの遠慮もなくお願いしたんです。ジンジャー入りのチャイを三杯ほど飲み、昼を過ぎたころ、おれは持つていたチラムで一服を入れようとしたんです。すると、坊主頭の男はおれの動きをみて、『店の前でチラムはやめてください』と注意するんですよ。そして、『インド人も見てますから』と、わかりきつたように言っただけです。おれは腹がたちましたね、たしかに店の前でチラムを吸うのは礼儀に反している、それはおれが悪いかもしれない、けど、インド人が注意するって言うのは、おかしいじゃないですか。別に、インド人が注意したところで、本屋にたいした迷惑をかけません。日本人の品位をさげることになるかもしれませんが、恥をかくのはおれです。坊主頭はほとんど迷惑のかわらないことですよ。ようは、坊主頭はおれの行為にたいして、偽善をしたんですよ。インド人が注意するのはべつになんの問題でもなくて、ただ、店の前で大麻を吸われるのが嫌なだけです。インド人のせいにするなど、おれは思いましたね」

「まあ、そつだ、インド人はあまり関係ないもんね。でも、店の前

で吸うのはどうかと思うけどね」

「それはしょうがないです、自分でも言われて気がついたんですから、けど、そんな自分の品のなさはいいんですよ、おれはその坊主頭の態度に腹がたつたんです。『このやろつ、遠まわしに言いやがつて』と思い、おれは持っていた大麻をほぐして、その場でジョイントを作ったんです。大麻を吸っているとあからさまにわかるチラムではなく、気づきにくいジョイントなら問題ないだろうと思いついて。坊主頭はせわしなく客の対応をしていましたが、おれのほうをちらちらと気にして、視線をなんども感じました。それでも、おれは出来あがったジョイントに關係なく火をつけて、本のつづきを読みました。坊主頭は、そんなおれを注意はしませんでしたよ」

「坂田君、たちが悪いよ」

「いいんです、林さん、そんなことは知ってますから。それでおれは傍若無人ほうじやくぶじんに本を読みつづけました。それでも、坊主頭は午前中とおなじように、『チャイは飲みませんか？』と、イモの顔をゆがめて声をかけてくるんですよ。おれは坊主頭が気持ち悪く見えました。が、やはりチャイをお願いしたんです。そして、夕方になるころには、すでにチャイを五杯飲んでいたんです。大好きなチャイもさすがに飽きて、食事をとっていないせいとか、胸焼けがしていたんです。なのに、『チャイは飲みますか？』と、坊主頭は聞いてくるんです。おれはさすがに断り、この男の意味がわからなくなりましたよ。バカのひとつ覚えでチャイをすすめてくるんですからね、もしかしたら、仏教ぶつじょうかぶれの施ほどこしに喜びを覚えていたのかも。なにせ、坊主頭ですから」

「よっぽどチャイを飲んでもらいたかったんだね」

「すすめるにもほどがありますよ！ むしろ、うつとうしかつたですから。で、日が暮れはじめると、客足は減り、坊主頭は満足そうな顔をうかべたまま、自分のそばのイスに腰かけて話しかけてきたんです。おれがなんとなく世間話をする、その男は三ヶ月前からインドに来て、給料なしで店を手伝っていると言っんです」

「それは立派じゃないか」

「おれも最初はそう思いました。けど、あたりが暗くなるにつれて店に日本人が集まり、気がつく、テーブルには若い男女一組、長い髪を結んだ男、不精ひげの老けた顔の男がいました。店のオーナーらしきインド人が戻ると、坊主頭は仕事が終わったとうれしそうに声をあげ、両手を高くあげて胸をそらし、日本人達に今日の忙しさを話しはじめたんです。べつにそれはいいんですよ、そのあとの行動がおれには理解できなかつたんです。いや、むしろ理解したくなかつたんです」

「へえー、なにがあつたの？」

「その日はたまたま節分だつたんです。坊主頭は日本人達にむかつて快活な声で、『じゃあ、夕食を食べて、豆まきしましょうか！』と言っんです。おれは目ん玉がひっくりかえりましたよ、なにせ、目の前の日本人達はうれしそうに反応しているんですから。おれは、テーブルに座つたまま、気にせず、本を読みつづけました。日がすっかり沈んだころ、テーブルには日本人女性が持ってきたという味噌を使った味噌汁がおかれ、米はなく、紫色の小さなたまねぎやニンジンなどの生野菜がありました。なにを思つたのか、日本人達は小さなナイフを使い、手のひらをまな板がわりに野菜を切り、生の野菜をかじりだすじゃないですか。おれはびっくりしましたよ、日本人同士がベジタリアン話にもりあがるんですから。けど、びっく

りしたのはそれだけじゃありません。味噌汁を飲んでうれしそうに声をかけあっているのです、おれも一口味噌汁をいただいたんですが、白味噌をつかった、いたって普通の味噌汁なんですよ。おいしかったです、体が揺らして歓声をあげるほどじゃありませんよ。なんか、貧しさの極みをみているようでしたね」

「よつぽど飢えていたんじゃない？」

「まあ、それもわかりますよ、けど、そのあと、全員でうれしそうに豆をぶつけあっているんです。まわりのインド人は好奇の目で不思議がって見ていましたよ。おれは見ていて、みょうに痛々しく、また、胸がムカムカしましたよ。出来の悪いココロのコマースヤルを見ているようで、必要以上に喜びをわかちあい、愚にもつかない声をわざと出し、なんとも気味悪い光景でしたね」

「あああ、そりゃーきついや」

「おれも豆まきにさそわれましたが、遠慮なく断りました。あんな豆まきに参加するぐらいなら、ガンガーの水を一リットル飲んだほうがよつぽどマシですよ」

「いや、ガンガーはきついや？ ヴアラナシのガンガーは見た？」

インドと同じように、強力な微生物がうようよしているよ」

「いえいえ、飲むのはハリドワールのガンガー水です」

「それはずるいよ！ 冷たくて、きれいなほうじゃないか」

「林さん、そんなことはどうでもいいんです。いえ、ヴアラナシのガンガー水を飲んだほうがましかもしれませぬ。それほどひどい光

景だったんです。股間を濡らした腐ったサークル活動ですよ。それで、おれはそんな日本人達をしりめにジョイントを巻いていたんです。やがて豆まきはおちついて、テーブルに戻った日本人達は楽しそうに会話をするんですが、ジョイントを巻いている自分を見て、だれ一人と反応をしめさないんです。テレパシーを使って、まさに見て見ぬふりですよ。おれは、ここにいる日本人達がジョイントを吸うと思って、太いのを数本巻いていたんですがね。ジョイントを巻き終えてから、トイレに行つてテーブルへ戻つてくると、日本人達は大麻の話をしていたんです。おれがイスにつくと、大麻を否定する話で盛りあがっていて、それぞれが大麻の否定的な考えを述べていました、それも教科書に書かれたとおりの有害性を得意げにですよ。さらに、坊主頭の日本人は自信ありげに、『昔は吸っていたけど、今は必要ないな!』と言うんです。すると、他の日本人達も賛成をしめしているんです。おれはふきだしそうになりました。こいつらは人がジョイントを巻いているときは無反応だったくせに、人がいないあいだに手を結び、そろって大麻を非難しやがる。そのくせ、『昔は吸っていたけど、今は必要ないな!』ですよ? 坊主頭らしく、悟りでもひらいたんでしょかね? けど、人を見下したようなその言葉は、大麻経験の浅い、きどつた言葉ですよ。大麻好きの人間は決してそんなことは言いません。『昔は吸っていたけど、今もやめられずに毎日吸っている』や、『昔は吸っていたけど、必要を感じてより吸うようになった』もしくは、『やめようと思わない』それらが真実の言葉ですよ」

「そりゃそつだ」

「おれは目の前の日本人がねずみに思えたんで、一人で太いジョイントを吸い、日本人達の顔に吹きかけるように息を吐きました。日本人達は眉間にしわを寄せていましたが、とくに強い言葉は言いませんでした。ジョイントを吸い終わるころ、坊主頭は店の前の露店

から来たインド人に金を払っていました。それは自分と他の客が飲んだチャイ代でした。おれはそのすがたを見て笑い声をあげました。すると、日本人達は顔をしかめて、ひそひそと話していました。おれは席を立ち、本を棚に戻し、テーブルにジョイントを一本残して去りました」

「いやー、長い話だね」

「なに言ってるんですか、林さん、短いですよ」

「でも、坂田君、君がかたよっているんじゃないの？」

「そうかもしれません。けど、林さん、そんな場面にいたらどうします？」

「豆まきするよ」

「ウソですよ！　こんなねた持っている人は豆まきはしません！」

「なに言ってるの？　ぼくは豆まき検定で一級をとった男だよ。知らない？　ぼくは幸福な豆を投げることで有名なんだから」

「林さんこそ、なに言ってるんですか！　豆じゃなくて種でしょ！」

「ああ、そうだ、種だよ。いやいや、豆だって。でも、坂田君、せっかく一年に一度の行事なんだから、参加しないのはもったいないよ。ぼくだったら、一緒に豆まきに参加して、坊主頭にこぶがでるぐらいの強さで投げつけるよ。こう、至近距離でバチツとね、豆が爆ぜるぐらいに」

「はっはっはっ、そりゃいいや!」

「きつと、坊主頭はドリアンのようにぼこぼこになって、汗臭い、黄色い臭いにおを放つよ」

「いやいや、林さん、そんな尖とがらないつて。でも、それぐらいに腹がたちましたよ、おれは、ああいった偽善的沈没が一番嫌いですよ。『ぼくはインドの店を無償で手伝っている、大麻も吸わない、日本の伝統を守っている』みたいなヤツがね。ちっぽけなボランティア活動で沈没に化粧して、日本からの逃避行を隠しているんですよ」

「ああ、そうかもしれないね、そいつは愚か者以上に愚かなことだ」

「でしょ？ 林さん、坊主頭のとどめの言葉があつてさ、おれが、『日本に戻りたくならない?』と尋ねると、『だって、いつでも戻れるじゃん!』って答えたんだよ! 『わたし、日本社会が怖くて沈没しています!』って証言しているようなもんですよ。それなら野菜かじってタダで本屋で働くんじゃなく、日本に戻ってバイトして、豆まきしやがれつてもんだよ。『おれはインドで店を持つんだ!』ぐらゐの答えなら納得できるけどさ」

「違つよ、そいつはインドで豆まきしにきたんだよ。ぼくは知っている」

「なら、はやく日本に帰れよ! ってなりますよ」

「きつと、一生インドで豆まきするんだよ」

「豆みたいに小さい野郎だから?」

「坂田君、それは言いすぎだよ！」

「なに言ってるんですか？ 林さんがバカにしているんじゃないですか？」

「いやいやいや、坂田君だって！」

「どっちでもいいですよ！ ただね、おれは、そいつを見て思ったんですよ。沈没するしないはべつに悪いことじゃなく、ただ、自分の本心を隠すのは気持ち悪いことだと」

「じゃあ、坂田君はなんで海外に来ているの？」

「インドの貧困をなくすためですよ！」

「ははは、偽善者だ！」

「なに言ってるんです！ 林さんはどうなんですか？」

「ぼくは、大麻を吸って、シタールを弾くだけだよ。坂田君は？」

「大麻を吸って、本を読むためです」

「なんか、坊主頭の男が一番役に立つ仕事しているんじゃない？」

「はっはっはっはっ！ そうですね、けど、気持ち悪い男ですよ！」

六

坂田がアジャンタに戻ると、桜井はみあたらず、川内は大部屋のベッドのうえで足を広げて眠っていた。枕を抱くようにうつぶせになり、品のあるいびきをたて、大型動物が昼寝をしているように思われた。坂田は林にジョイントをもらったので、さっそく二人と一服いれたかったが、桜井がいないので川内はそっとしておこうと思っただ。

坂田は自分の持っていた茶色い大麻をほぐし、水パイプで五回吸った。ポコポコポコと泡立つ音を聞いていて、ふと、水パイプはサックスに似ていると思った。竹の水パイプは吸い口から直接吸い込むのだが、中国雲南省にある街、ダリーにいた時は、腹の大きいキセル型の水パイプを使っていた。

坂田はふと、ジャズが聴きたくなかった。インドに来てからというもの、耳にする音はジャンベやタブラーなどの太鼓の音ばかりで、あとはシタールの幻想的な音色ぐらいだった。路上のインド人が吹く縦笛を聴くこともあったが、やけに音が澄すんでいて、雄大な山や草原をイメージされてせつなくなるばかりだった。金管楽器特有のこもった温かみのある音色はまったく聴くことがなかった。

坂田は戸棚に設置されたミニコンポの電源を入れ、チェンジャーをひらいた。なかにはCD Rが入っていて、白い表面には“ジミヘン”と黒いマジックで乱雑に書かれていた。坂田はチェンジャーをとじて、プレイボタンを押した。それから、黒いつまみを左に回

した。左右のスピーカーからギザギザしたギターの音がながれ、坂田は耳に意識を集中させて、つまみを右に回して音を調節した。坂田は大部屋の中で眠っている川内が気になったので、それほど音量は大きくしなかった。それに、大音量で音を聴くのはあまり好きじゃなかった。

坂田は中庭のテーブルでマンガを読みつづけた。昼過ぎの部屋は灼熱と化し、湿気のないサウナは中にいる物の水分を容赦なくうばった。扇風機を回したところで温度が下がるわけではなく、気休めどころか、熱風が体をすべりイラだちをおおるだけだった。それにくらべて、大部屋の前のテーブルは屋根に陰り、直射日光はさけられた。風通しはよく、扇風機よりもはるかにさわやかだった。

六曲目のイントロがながれたころ、スキンヘッドの男が坂田のいるテーブルに近づいてきた。上半身は裸で、赤に黄色の縦のラインが入った短パンをはいていた。肌は黒く日焼けしていたが、坂田のような小麦色ではなく、あぶらぎった赤黒い色をしていた。そして毛の見あたらない頭皮も同様の色をしていた。

男は飯島という名で、坂田の隣の部屋に泊まっていた。飯島はあごのがっちりした精力あふれる顔で、やけに丸い眼が特徴だった。体も厚みのあるがっちりした筋肉質で、競泳選手というよりは、てきどに脂肪がのったプロレスラーだった。

「こんにちわ」

飯島は人を馬鹿にした笑いをうかべて坂田に声をかけ、プラスチックのイスをひいて腰かけた。

「どうも、こんにちわ」

坂田は無愛想に声をだした。坂田は音楽を聴き、マンガに集中していたのを邪魔されて、とても腹がたつた。坂田は音楽を聴いているとき、マンガを読んでいるとき、また、映画を観ているときなどに声をかけられるのが大嫌いだった。たいていは異常なほどの嫌悪感を前面にだし、相手の顔をろくに見ず、会話をうちきるけん制の言葉をはきだした。これは、飯島が声をかけたのではなく、桜井、もしくは川内が声をかけても同様な態度をしめしていた。坂田は普段からそうだった性質があつたのだが、大麻を吸つたあとは何倍もその傾向が強くなった。

「それにしても、今日は暑いね」

飯島はテーブルに右肘をのせ、ほぼづえをついた。

「そつつすね」

坂田は飯島の顔を見ず、ぼそつと言った。

「ねえ、なんのマンガ読んでいるんだい？」

飯島はとろくさい口調で言った。

「『火の鳥』です」

坂田は一言で言った。たずねる前に、表紙を見ればわかるだろう、と思った。

「ふっん、おもしろい？」

飯島は遠慮なく、言った。

「おもしろくなきゃ、読まないですよ」

坂田はイヤミっいたらしく言った。

「そつだよね、ぼくも読んだよ、そのマンガ、とてもおもしろかったよ」

飯島は口をなままずのように広げて言った。

「そつっすか」

坂田は、ただそう言った。

「マンガを読むんじゃないくて、外に出なくていいの？ 今日はずうがうから、外に出ないともったいないもんね」

飯島はねちっこく言った。

「いいんですよ。さっきまで外にいましたから」

坂田はふてぶてしく言った。

「ああ、そうなの？ ごめんね、それは知らなかった。ぼくはてつきり、外に出ていないと思ってね、ほら、いつもマンガばかり読んでるでしょ？ ぼくはね、心配して言ったんだよ」

飯島は体を起こし、背もたれにもたれかかった。

「ありがとうございます」

坂田は言葉の意味をもたずに言った。

「いえいえ、それよりもさあ、ねえ、それ、それさあ、大麻でしょ？
ねえ、それ吸つてさ、頭おかしくならない？」

飯島はからかうように言った。

「あん？」

坂田は顔をあげて、飯島の顔をまじまじ見た。しまりのない笑いを浮かべ、小汚いタヌキのように見えた。坂田は飯島の顔が生理的に受けつけなかった。

そもそも、坂田は飯島のことあまり好きではなかった。飯島は隣の部屋にいたが、坂田はほとんど会話をしたことがなかった。朝、目が覚めると、たいてい飯島は廊下に座りこんで、ヨガをしていた。坂田はそんな飯島を見て、最低限のあいさつをするだけで、話しかけようとする気はまるでおきなかった。坂田は飯島の顔、体から放たれる雰囲気があるとなく好きじゃなかった。

そんな男が、マンガを読んでいる自分の邪魔をするのが気に入らなかった。だが、マンガが読みたかったので相手にせず我慢していたが、大麻のことを聞かれて、つい、カッとなった。

「あんたはなんなんだよ！ 人がマンガを読んでいるのも気にかかず、醜みにくいつらの皮を厚くしてくだらないことをベラベラと話しゃがって、あんたは目があんのか？ 人がマンガを読んでいるだろう？ 見えねえのか？ その丸っこい眼でいったいなに見てるんだ？

それになんだよ？ あん？ 人の頭がおかしいってか？ まったくよ！ ふざけんじゃねえ！」

坂田はマンガを叩きつけて置き、腫れぼったい目を精一杯広げて、声を荒げて言った。

「いやいやいや、そんなに怒らないでくれよ、悪気はないんだから。つい、ねえ、きみが心配になってね」

飯島はひょうひょうとして言った。

「ああ？ なにが心配なんだよ？ あん？ おれはなあ、あんたに心配される筋合いはねえよ。心配するなら自分の頭皮でも心配しやがれ。このひま人が！」

「髪の毛はよけいな世話だよ、ぼくは好んで頭をまるめているんだから。それに、ひま人はきみだろう？ 四六時中大麻を吸ってはマンガを読み、ろくに外も出ずにダラダラと一日をすごして、若いくせに、いつたい、なんて無為な時間を過ごしているんだ？」

「ああ、うるせえよタヌキおやじが、てめえだってインチキくせえヨガばかりして、外に出てねえじゃんかよ。おい？」

「なに言ってるの、ぼくは毎日外に出てるさ、一日中宿にいたんじやねえ、心と体はなまけちゃうから、毎日海岸沿いを散歩しているよ」

「それがどうした？ ただの散歩じゃねえか」

「いや、出ないよりはマシさ。それに、ぼくはきみたちみたいに大

麻は吸わないからね」

「あああ？ 大麻がなんだって？」

「ぼくは大麻は吸わないし、吸う気もない。きみたちみたいな中毒者と違って、健全な心と体をもっているからね。ぼくは大麻を吸って現実逃避するような弱い人間じゃないから、大麻を吸って自分を汚すようなことはしない。だからさ、ぼくは、君たちのような若い人間が大麻を吸って、怠^{なま}けて時間を食いつぶすのを見ると悲しくなるんだよ。それに、どうだい？ 朝から大麻を吸ってみつともないと思わないの？」

「ああ、まったく思わねえよ。おれは好きで大麻を吸っているんだからな。たとえ、はたから見えて現実逃避していると思われたって、んなの、知ったこつちやねえ。おれは好きで吸っているんだ。それによ、てめえみたいにジャンキー呼ばわりするたいいのやつは、吸ったこともねえのに、わかったつもりで説教をたれるんだよ。おい、知ったか野郎、薬物という固定観念にとらわれて、大麻を吸う勇氣もねえくせに、頭でつかちの頭を無駄につかってまとはずれな批評をくだすんじゃねえよ。みつともねえのは、てめえだろう？ おい、はげ、知ってるか？ 経験のない人間の言うことなんてただの空想だよ、真実からおおきくはなれているんだぜ。食ったことのない料理の味を、うまそうに解説したってそんなのは二セモノなんだよ！」

「まあ、たしかにきみの言うことには一理あるだろう、けれど、それは犯罪者特有のエゴイストな理屈だよ。大麻は悪いものだと言律で決まっているんだ。だからやってはいけない。そんなこともわからないのかい？ それに、記憶力の低下や、行動意欲の減退、精神障害がある。きみの行動をみればわかるだろう、動くことなく一日

中マンガを読んでいる。立派に症状が表れているじゃないか。このまま吸いつづけていたら、あとあと後悔することになるよ」

「はあん？ それは、おれがマンガを一日中読んでいるからか？

バカバカしい！ おれはなあ、ものおぼえのつくころからマンガを読みはじめ、マンガで育ってきた人間なんだよ。月水木はコンビニで最低一時間は立ち読みして、マンガ喫茶に行けば最低五時間はいる、『三国志』のような長編物を読みだせば、全巻読み終えるまで毎日かよう、それも、気に入った漫画家が見つければ、ほとんどの作品を読み終えるまで気がすまなんだよ。おれはなあ、昔からマンガ中毒なんだよ、せまい視野で見て、理解した気であるんじゃないやねえよ！ だいいち、てめえは大麻を吸ったことはあんのか？」

「ああ、むかし、一度だけ吸ったことがあるよ。けど、ぼくには効かなかったね」

「はっはっはっ、それは良かったな！ てめえ、バカじゃねえのか？ 効いていなきゃ吸ったうちに入らねえよ。それに、効かねえって言うやつがよくいるけどよ、それはなあ、びびって肺に煙をためずに吐き出すからだ。それが、質の悪い大麻を吸っているからだよ。えらそうに誇ってんじゃないやねえよ！ クソはげが！」

「なにを言うんだ、ぼくはちゃんと肺にためたよ。それでも、効かなかった。ぼくは効かない体質なんだよ」

「はっ？ じゃあ、今試してみようぜ？ あんたの目の前にはたくさん大麻がころがっているんだ。効かないというなら、目の前で吸って証明してくれよ」

「い、いま？ いいや、遠慮しておくよ、ぼくはきみたちみたいに

なりたくないから、それに、法律で禁止されているんだ。ぼくは犯罪者の仲間入りはしない」

「あああん？ あんたびびってんの？ 吸うの怖いんだ！ いやー、でかい図体しているくせに、ずいぶんと肝っ玉は小さいんだ」

「なにを言う、そんな安い挑発にのらないよ。ぼくはきみの思惑にだまされない、そうやって人を大麻で汚染するんだろう？ わかっている。ぼくは吸わない」

「あんたなに言ってるんだ？ おれはそんなこと考えちゃいねえよ。おれは、あんたが偉そうに大麻について批判するからよ、より理解をしめしてもらいたいだけなんだ。おれは、あんたが大麻を批判することについて、べつに悪いと思っっちゃいねえ、立派なひとつの意見だからな。ただ、それがよ、どこにでもありふれた一般的な意見でつまらないんだよ。おれを言いくるめたいのなら、もっと、説得力を持った言葉を言うんだな。あんたなあ、自分の言葉に力を持たせたいなら、ここで大麻を吸うべきなんだよ。わかる？ あんたの言葉はうすっぺらなんだよ」

「それが挑発なんだよ！ そうやって、知り合った人をだましてきたんだろう？ ぼくにはわかるぞ！」

「あんた、疑いすぎだよ。よっぽど頭が固いんだな。べつに吸わなくてもかまわねえけどよ、ここで吸ったほうが経験になるんだぜ？ 大麻を吸えばコンクリートの頭も、プルプルにやわらかくなるぜ？ だいいち、あんた、自分が強い人間だと思っているなら、大麻を吸っただけで、とらわれることはないだろう？ あんた、ほんとは自分に自信がないんだろう？ 正直言えよ、『ほんとは怖くて吸えません』とはつきり言えよ」

「ばかいうな、怖くはない。ただ、いけないことなんだよ。法律で決まっている悪いことなんだ」

「ああ、たしかに法律ではやっていけないと決められているよ。けどよ、法律がすべてなのか？ おれからみたら、あんたは法律に縛られた目玉のない人形に見えるよ。人間が決めた法がすべてじゃないんだぜ、そのときの状況がすべてなんだよ。それによ、おもしろいことに、オランダでは特定の場所での喫煙は認められているんだぜ？」

「ああ、それはぼくも知っている。だけど、日本では吸ってはいけないんだ」

「まあ、たしかにオランダじゃないからな。けどよ、日本じゃ極悪に考えられている大麻が、オランダでは一部認められているんだぜ？　なんかおかしくねえか？」

「それは国が違うんだ、あたりまえだろう？」

「そう、国が違うからな、じゃあ、今ここは日本か？」

「日本じゃない。けど、オランダでもない」

「そうだな、インドだもんな。それに、ここも合法じゃなねえからな。けどよ、不思議なことに、この宿、アジヤンタはある意味合法なんだよ」

「そんなのは勝手な理屈だろう？　結局、ここで吸っても罪になるじゃないか」

「ああ、そうだよ、勝手な理屈だよ、むしろ理屈にさえなつちやいねえ。だけどよ、わかっていることは、ここで吸ってもたいした問題じゃないということだ。それが大事なんだよ」

「それこそ無法者の考えだ」

「だってよ、別の犯罪で考えてみるよ？ 何年か前に不法投棄が立派な犯罪になつただろう？ あれで考えてみようぜ？」

「不法投棄と大麻じゃまるでちがうじゃないか」

「そんなことはねえ、法律で定められている点ではいっしょだろう？ 悪いことにはかわりないんだろう？ 今は冷蔵庫やタンスを山に捨てれば警察に捕まる。そもそも、それはなんでだ？」

「それは環境破壊につながる悪い行為だからだろう。自分の所有物は責任を持って処理する必要がある。とはいえ、それだけじゃないだろうが」

「まあそうだ、環境破壊につながる。じゃあ、ある男がいらなくなつたタンスを、自分の責任を持って、川原で燃やして処理したらどうなる？」

「それも捕まるだろう。野焼きも法に触れる行為だからな」

「そうだ、自分の責任を持って燃やすことも禁じられている。じゃあ、オーストラリアに住んでいる原住民が、自分の持っていた家具がいらなくなり、燃やしたとしたらどうなる？ 捕まるか？」

「いや、オーストラリアの法律は知らないが、おそらく捕まらないだろう」

「ああ、おれも知らないが、燃やしている人間および、そのまわりにいる人間はなにも罪を感じないだろう。もしかしたら、火が燃えたことで祭りでもはじまり、村じゅうの人が陽気になってにぎわうかもしれない。なんかおかしくねえか？ ある場所ではダンスを燃やすと捕まるが、ある場所では人々を喜ばせるかもしれないんだぜ？」

「それはあくまで、きみの想像だろう？ それに国が違って、法も違うんだ」

「まあ、そうだ。けどよ、日本じゃ捕まるが、オーストラリアじゃ捕まらないと仮定しよう。それなら、あんたがオーストラリアに行つてダンスを燃やしたらどうなる？ 捕まるか？」

「いや、わからない。野焼きが海外でも適応されるか知らないから、わからないね」

「まあ、そうだ、おれも知らない。でもよ、それは、悪い行為か？」

「うーん、はっきりと悪いとは言えないな。悪いかと言ったら、たいてい悪くはないかもしれない。それが原因で草原を燃やしたりしたら悪いが、そう悪くはないだろうな」

「おれもそう思う、野焼きしたいはたいして悪い行為じゃないと思う。物を燃やすのは原始的なころから人間の生活の一部だ。燃やすのはさほどの罪じゃないと思う。なにせ、人間が死んだら燃やす習慣があるんだからな。それなのによ、ダンスを燃やして捕まるのは

おかしいじゃねえか？ 燃やすというのは、物質を地球に返す一行為なのになぜ」

「ああ、そう言われると、そうかもしれないね」

「じゃあ、日本の法律で決まっている野焼きは悪いと言えるか？」

「法律では悪いことだろう、けど、野焼きしたいは悪いとは言えないかも」

「じゃあ、大麻は？」

「大麻と不法投棄は別だろう？」

「まあ、そうだな、別だよ。けどよ、大麻の喫煙がそれほど悪いことか？」

「ああ、社会に悪影響を与える」

「そうかもな、でもよ、いったい、なんの悪影響を与えるんだ？ だらけて、怠慢たいまんになって、生産活動たひんかつどうがにぶるからか？」

「それもあるだろう」

「けど、日本人は働きすぎじゃねえか？ どう考えても、必要な物を作りすぎじゃねえか？ 不法投棄なんていう罪も、多くの物を生みだしつつけた結果、生まれたんじゃねえのか？ おれはな、むしろ過剰かじょうな生産活動を抑えるべきだと思う。環境問題なんて、小さな子供でも理解できるぜ？ 作りすぎるからおかしくなるんだ。地球はあきらかに異変が起こっているじゃねえかよ。物だけじゃねえ、

人間だつて作りすぎた。インドの小道を歩けばわかるだろう？ 世界中には食えない人間が大量にいるじゃねえか。人間は急激に増えすぎなんだよ。それに、日本の毎年の自殺者の数を見てみるよ、毎年三万人の人間がみずから命を絶っているんだぜ？ 狂っていると思わねえか？ 得るものがあれば失うものがある、それが自然の法じゃねえか、バランスがくずれるのはあたりまえだろ、人間は多くの物を手に入れすぎなんだよ」

「三万というケタが大きすぎるから、あまりなんとも思わなくなっているけど、たしかに、狂っている」

「そつだよ、自分が三万回死ぬことを考えてみるよ？ 異常じゃねえか！ それはな、資本主義一辺倒が生んだ、大量生産の犠牲者じゃねえのか？ 使い捨ての物を大量に生み出し続けているくせに、物を、自然を、人間を大切にしましょうだと？ ふざんけんなよ！ そんな矛盾むじゆんくそくらえだ！ もう、いまさら遅いんだよ！ それにな、地球にやさしいエコなんて、じつにバカバカしい！ おい、あんた、地球にやさしい最高のエコって知っているか？ それはな、人間が大量に死ぬことだよ！ 大量の人間が死ねば、資源の大量消費は抑えられ、環境破壊の曲線はゆるやかになり、動植物は豊かさを取り戻し、職に困っている人間は定職につき、食うのに困っている人間も食い物にありつけるんだ。これ以上人間が増えたところで、つぺんの人間が肥えるだけで、多くの貧者が増えるだけじゃねえか。日本の社会は、物を大切にすることをうしない、人間を人間と見ることができなくなり、使えなくなった物は修理することなく廃棄されている。なんて言っただって、直すよりも買ったほうが安いし早いからな！ けど、安いから買い換えるのか？ 使えなくなったら捨てて、新しいものを手に入れればいいのか？ そうじゃねえだろう？ どんなものだって心があるんだ、次々と新しいものを手に入れて、古いものを捨ててどうなる？ 人間としての心をそのたびに

捨てていくことになるじゃねえか。どうだ、そう思わねえか？」

「ああ、それはわかる気がする。ぼくはヨガが好きだから、どうも日本で生活していると気の流れが悪くなるのを感じるよ」

「そうさ、忙しく、まじめに、立派に社会に貢献すればするほど、自分達の首を絞めることになるんだからな。おかしなもんだよ、今はきがるに、焚き火できない時代だぜ？ へたすりゃ、とつつかまるからな。おれのじいちゃんの時代は、火を焚いっただって何の文句も言われなかつたてよ。変な時代だよ！」

「ああ、おれが子供の時はよく焚き火したもんな」

「だろ？ 今はおかしな時代さ！ それは、拝金主義の日本が生んだ産物だよ。ほら、最近のヤフーニュースは見ているか？ 世界的な経済危機だつてよ、笑っちゃうよ。一生懸命に働いていた派遣労働者が、枯れ枝のようにかんたんに切られ、団結して反発しているんだからな。地に落ちた枝は集まって、今は勢いよく燃えているけどよ、時間がたてば燃え尽きて、灰になっちゃうんだ。どうなると思う？ もしかしたら来年は自殺者の数を更新するんじゃないの？ もはや、人間は人間じゃなく、ただの労働力としてのかたまりしか見られていないんだ。日本じゃ、物も人間も一緒さ！ 大量生産が生んだ、画一的な、味気のない、中身のない、使い捨てのものばかりがあふれている」

「そうかもしれない」

「だから、おれは遠慮なく大麻を吸う。そんな資本主義の幻影にとらわれたつごうのいい法律にしたがつてなんになる？ 大麻がそんなに悪いものか？ おれはそうは思わない。おれは大麻を吸っても

人を傷つけはしない。法律で定められているからといって、自分の得になる商売で人をだますようなことはしない。大麻を吸っているからと言って、おれは人間としての心を失っちゃいけない。大麻の喫煙は、資本主義社会を支えるのに悪影響を及ぼすから禁止されているのか？ 怠慢になって、勤勉に働かなくなるからか？ それならどんどん悪影響を与えて、社会がぶつ壊れてしまえばいいんだ。時代が早すぎる！ もっと、ゆっくりと進んでもいいじゃないか！物を物と、人を人と、自然を自然と見ない社会なんて壊れてしまえばいいんだよ！」

「おいおい、そんなに怒れるなよ。きみの熱い心はわかったからさ」
「ああ、あああ、すいません。ああ、つい、興奮しちゃって、ああ、そうだ、ちよつと、おちつくために一服入れてもいいですか？」

坂田はそう言って、ポリエチレンの袋からジョイントを取り出した。びっしょりとなった手から、ジョイントに汗が染みこんだ。

「ああ、かまわず吸ってくれよ」

「そういえば、おれ、おじさんの名前を知らねえや。おれ、坂田って言うんですよ」

「ぼくは飯島だよ」

「飯島さん、つい熱くなって、いや、無礼な口をきいてすいません」
「いやいや、ぼくもいやらしい態度をとって悪かったよ」

「じゃあ、さっそくいただきます」

坂田はそう言い、林からもらったジョイントに火をつけ、勢いよく肺をくもらせた。

「ん、ん、飯島さん、吸いますか？」

坂田はなにげなくジョイントを前に出した。

「あつ、ああ、いただくかな。どうやって吸うんだい？」

飯島は一瞬ためらい、ジョイントをすっと受けとった。

「ええつと」

「アナタたち、チャイモツテキタヨ！」

タメルが階段からすがたを現し、あたたかい笑顔を浮かべて近づいてきた。

坂田はジョイントを不器用に吸う飯島のすがたを見て、「ゴツイねたを吸わせて、大丈夫か？」と思った。飯島のツルツルに剃られた頭皮は脂汗を浮かばせ、丸い目を大きく開いてジョイントに口つけていた。肉厚のある唇をとがらせ、関節の太い人差し指と中指に挟まれたしわのあるジョイントを吸う顔は、坂田にとってマヌケなひよつとこに見えた。大きく肺に入れるわけではなく、吸いこみを無駄なほど細かくきざみ、ちよびちよびと吸い、アダルトビデオに出てくる男優のように下劣な音をだした。

「うーん、これは、おいしグフオツ！ ウゴホツ！ ンゴホツ！
オホツ！ オホツ！ ゴオホーッ！ ゴツオホーッ！ オエツ
！」

ジョイントを口から離し、あわてて感想を述べようとすると、飯島は大きい目玉が飛びでるほど激しく咳きこみ、鼓膜をひっかく轟音をたてて爆発し、口から色の濃い煙を吹いた。顔中にあるすべての穴が大きく咳きこみ、赤黒い顔に血管の筋をはしらせ、銅色をさらに赤く染まらせた。手でちじれ毛の生えた胸板をおさえ、地面に食いつかんばかりに顔をさげ、内臓を吐きだそうとしていた。

「はっはっはっはっ、飯島さん、だいじょぶ？」

坂田は大声で笑い、楽しそうに言った。

「ゴフオツ！ ゴフオツン！ ンンン！ ゴフオツ！ ゴフオツ！」

飯島はこれ以上ないぐらいに目を開き、坂田の顔を見上げ、忙しそうに顔を振りながらかわいそうな咳をつづけた。

「はっはっはっはっはっ！ 飯島さん、破裂させるとねえ、がつつり効きますよ！」

坂田は腹をおさえて愉快に笑った。

「ざかだぐん！ ゴフオツゴフオツ！ ざがたぐん！ ぼどをやけどしだ！ ごぎゅうだゴフオツ！ げきない！」

飯島は訴えるように指でのどをさして立派な体を肩から揺らし、外見とは似てもつかない、ほそい、しゃがれた、悪魔の声をしぼりだした。坂田は呪われた人間を見るようで、飯島がかわいそうになった。飯島の血管はミミズのように太くなっていた。

「飯島さん！ あぶない、あぶないって！ ほら、チャイがあるよ、これ飲んで！」

坂田はくすんだ銀色のコップを手に持ち、テーブルの横で上半身をかがめている飯島に近づいた。坂田は指に挟まれたジョイントをうけとり、かわりにチャイを手わたした。飯島に無意識になぶられたように、ジョイントはクニヤツとやわらかくしぼんで折れ曲がっていた。飯島は銀色のコップを必死でにらみ、咳せきのタイミングをみはからってチャイを飲んだ。

「グボウオツ！」

白茶色のチャイは火がついたようにとびだし、坂田の顔におそいかかった。ふいをつかれた坂田の右目にチャイがはいり、坂田はガバーツと背もたれによりかかり、イスとともにうしろに倒れた。坂田は壁に後頭部を打ち、鎖骨のあいだにささるほど首を大きくまげて、頭を壁にこすりつけたまま背中から地面に落ちた。

「イデー！」

坂田は体勢を変えず、足をあげたまま大声をあげた。

「ざかた君、もうじわけない！」

飯島はなみだを浮かべた真剣な顔つきで、坂田の細い足首を見て言った。右手に持っていたチャイの中身は半分になり、手はびしょびしょに濡れていた。

「はっはっはっはっ！ 飯島さん、いやがらせでしょ！ これはいやがらせでしょ？」

坂田はゆっくりと体を横に動かし、ジョイントを持っていない手で地面を押し、体を起こした。

「もうじわけない、ほとんど、もうじわけない！ づい、咳きこんでじまつて」

飯島はのどのあばれをこらえているせいで、顔をピクピクと震わせ、まるで怒りをためているように見えた。

「はっはっはっ、もう、飯島さん、“グレート・ムタ”じゃないんだから、きゆうな毒霧はかんべんしてよ。もう、おかげで右目がや

「られちゃったじゃんか！」

坂田は片目をつぶったままイスをなおし、おちつかせるようにジヨイントを大きく吸って、飯島にわたした。飯島は小さく咳きこんでいたが、顔の赤みはとれかかっていた。

「ほんど、もうしわけない！」

飯島は頭を下げて謝った。

「いや、いいて、いいて、飯島さん」

坂田はそう言いながら階段わきの洗い場へ歩いた。すると、階段から黒いバックパックを背負った若い男が上がってきて、坂田と目があつた。

「こんにちはわ！」

男の声は高かった。

「はっはっはっ、こんにちはわ」

坂田は右目をつぶったまま、うれしそうにこたえた。

「どうしたんです？ 顔が濡れていますよ？ パーティーでもしているんですか？」

男は警戒せず、ずけずけと興味ありげに言った。

「いや、ちょっとさ、毒霧をつけて」

坂田は肩をすぼめてあげ、首を一度かしげて言った。

「へー、毒霧ですか？ 毒を吐く人がいるんですね？ いや、それは困りましたね。ぼくも毒が大好きなんですよ！」

「はっはっ！ なに、毒が好きなの？ じゃあ、あそこに座っているハゲ頭の人のそばに行きな、毒を吹きかけてもらえるよ」

坂田は目線で合図した。飯島がこちらを見ていたので目が合った。

「ひどいな！ ワザとじゃないって！ それにハゲじゃなくて、剃っているんだよ」

飯島は額にしわを寄せて言った。

「あの人はですか、ああ、そうだ、どうです？ ぼくクサを持っているんで、好きだったら一緒にボンしませんか？」

「あああ、ちょうど、ジョイントをまわしていたところなんだ」

「それはいいところです、ぼく、荷物を置いてきますね」

男は大部屋に入り、坂田は洗い場で顔を洗った。そして、飯島はちよびちよびとジョイントを吸っていた。

坂田が上着を着替えてテーブルへ戻ると、男はすでにイスにつき、しぼんだジョイントを吸っていた。男の短い髪には白い毛がまじり、顔はカサカサに荒れていて、顔は黒かったがアレルギー症状らしく水気がなかった。男は育ちのよさそうなくったくのない笑顔をみせ、

やさしい目をしていた。だれとでもすぐに打ち解けられる雰囲気をもち、めったに人から憎まれなさそうだった。

「これ、いいクサですね！」男は素直な声で言った。

「そうでしょ？ おれも気に入ってるんだ」

「これはそんなにいいのかい？」飯島の目はトロンとしていた。

「ブランドものに比べると質は落ちますが、インドで手に入るのなら十分にいいですよ。いや、いいの吸っているな！」

坂田が口を開くよりはやく男がしゃべった。

「ああ、けど、これはもらいものなんだよ。今日知り合った人にもらってさ、明日おれの分が手に入るんだ」

坂田は男からジョイントを受けとった。

「そうなんですか、いいな、ああ、そうそう、ぼくは山田って言うんですよ！」

「おれは坂田だ、よろしく！」

「ぼくは飯島だよ」

「それにしても、この宿よさそうですね！ 宿に入っただびっくりしましたよ！ なんですかあの本の量は？ ここはマンガ喫茶じゃないですか！」

山田は大げさなてぶりをまじえて言った。山田の目はたれかかっ
ていて、愛嬌のある顔をしていた。

「ああ、ヤバイだろう？ あの本の量は反則さ！」

坂田は口から煙をこぼしながら言った。

「ほんと、危険ですよ！ 『きみ！ 沈没していきなさい！』って
宿が言っているようなもんじゃ不是吗？ それに、さっそくジ
ョイントをまわしている人がいるんですからね、いや、もう、言う
ことなしですよ！」

「ここは“ガンジャ”が解禁されたマンガ喫茶だからな」

坂田は飯島にジョイントを渡した。飯島はゆったりと頭を揺らし
ていた。

「けど、マンガの読みすぎはよくないから、てきどに体を動かす必
要があるよ」

飯島は赤い目をしていた。

「だいじょうぶですよ！ ぼくは体を動かすのが好きですから、じ
っとしていることができないんですよ」

山田は手を交互に振りあげ、コンポからながれる音にあわせて頭
を振った。

「そつえば、飯島さんはマンガを読まないんですか？」

「ぼく？ ぼくはもう読み飽きたよ。ここにある本はだいたい読んだからね」

飯島はジョイントに口つけて、すぐに山田へ渡した。

「ああそつなの？ おれてつきりマンガがきらいなんだと思ったよ。なんだ、好きなんですね？」

「べつに好きじゃないけど、ひまだからさ」

「へえー、飯島さんはどのぐらいこの宿にいるんですか？」

山田はジョイントを吸いつくすように、大きく音をたてた。ジョイントの先端がピカツと赤く輝いた。

「ぼくは五ヶ月ぐらいかな」

「ながつ！」

坂田は変な声をだした。

「飯島さん、五ヶ月ですか？ そんなにこの宿にいるんだ？」

「ああ、そつだよ、おかげで、いろんな沈没者をここで見てきたよ。だからだよ、坂田君、きみにあんな注意をしたのは。インドのハードな旅に疲れてか知らないけど、大麻に汚染されて、宿にダラダラと沈没していく若者を、イヤってほど見たよ。バッドドリップって言うんだっけ？ 死んだように近くの道で倒れて、宿に迷惑をかけたヤツがいたよ。ほかに、大麻を勝手に吸った、吸わないでもめているヤツもいたね」

「そうだったんですか！」

坂田は細いあごをのばし、口を広げていった。

「ああ、ぼくはね、若者が海外に来て違った文化を体験し、見聞を広めるのは良いことだと思うよ。けどね、せつかく海外に来たというのに、日本にいるのと変わらないような生活を送る若者を見るともったいなくてさ。海外に来る目的が見えないっていつのかな？日本人同士でつるんで、大麻を吸っている人にね、なんか腹がたつてくるんだよ」

飯島の目はすでに小さかった。

「まあ、たしかに、いろんな国の人と交流したほうがいいですからね」

坂田は山田からジョイントを受け取った。

「そうですね！ ぼくもそう思います！」

山田は大きく息を吐いた。

「でも、どう？ 飯島さん、大麻は効いてる？」

「ああ、なんか、頭がぼーっとしてね、ほら、音がながれているでしょ？ なんか、音が違って聴こえるよ。こつ、目をつぶると、音にあわせてイメージがつかんでき。なんかふわふわした感じだよ」

「ああ、それならよかったよ、けど、飯島さんはそろそろ吸うのを

やめときな。ゲロ吐いて地面にくちづけするはめになるからな」

「ああ、そうだね」

飯島はなにかを思い浮かべたように目を動かし、小さくうなずいた。

「どうしたんですか？」

山田は坂田の顔をみて言った。

「いやさあ、飯島さんは大麻を吸うのが今日で二回目なんだよ」

坂田はジョイントを大きく吸いこんだ。

「そうなんですか？ いいな！ 飯島さん、吸いはじめのとびはあとと味わえないから、今はぞんぶんに吸ったほうがいいですよ！」

「おいおい、そんなこと言うなよ。バッドに入ったらお互いにめんどくさいだろう？」

坂田はジョイントを石の灰皿に押しつけた。

「だって、うらやましいんですよ！ ぼくなんて、いくら吸ったて最初のような新鮮さは味わえないですから、もう、最近じゃ、バッドだって味わえないですよ！」

山田は手を頭の上でまわして言った。

「そりゃ、おまえだろう？ まあ、たしかに吸いはじめの心地よさ

はたまらないけどさ、ムリに吸う必要はねえじゃん？」

坂田は目を細くし、低い声で言った。

「ああ、いいよ、ぼくはこのへんでとめておくよ。さっきも坂田君に迷惑かけたしね」

飯島はテーブルを見て言った。

「ああ、いいんですよ、飯島さん、べつに、楽しかったですから」

坂田は飯島の頭皮を見て言った。

「毒霧ですか？」

山田はポケットからプラスチックのケースを取り出して、テーブルに置いた。

「あああ、そっだよ」

坂田は山田の動きを目で追った。

「じゃあ、飯島さん、最後に一服だけしましよつよ。せつかくですから、ぼくのクサも味わってください」

山田はケースをうえに開き、中からタバコほどの大きさのジヨイントを取り出した。

「おいおい、飯島さんをおおるなよ」

坂田は山田を責めるように言った。

「いやいや、だいじょうぶ、あと一服でとめておくよ」

飯島は大きな手のひらをみせて、坂田にむかって数回振った。

「坂田君はもちろん吸いますよね？」

山田は慣れた動きで、ジョイントの先に火をつけた。

「ああ、おれはもちろん無制限だよ！」

「じゃあ、いきますか？」

そう言って、山田はジョイントの先をいつきに光らせた。大きな煙があがり、ピンとしたジョイントを坂田の手へ静かにわたした。坂田は二三度、煙の輪をたてて吸い、うかがうように飯島の前へ出した。飯島は慎重にジョイントをつまみ、何度も小さくジョイントを吸った。飯島は口を一本に閉め、山田の顔をみながらジョイントをわたした。山田はジョイントを持ったまま息を止めていた。

「ぶはー、これはガツンとくるねえ！」

坂田の景気のよい声と同時に飯島も息を吐いた。山田も大きく息を吐き、間髪かんぱつをいれずにジョイントを吸い、何度か首を縦に振った。ちようど、ミニコンポから流れていた音楽はとまり、あたりは静かになった。遠くからインドの生活の音が聞こえた。

「坂田君、大麻もそう悪いものじゃないかもね」

飯島はぼそつと言い、大麻を吸った。

「そうですね、飯島さん、いちがいに悪いとは決めつけられませんよ。どんなものだって、それじたいは悪くないんですから。もし、悪いと言つなら、使う人間の、使い方が悪いんですからね」

坂田は飯島から大麻をうけとった。

「うん、そうかもね」

飯島は淡い煙を吐きながら、自分に向かってうなずいた。山田は顔をふくらませたまま、ゆっくりとうなずいた。

「あとは、タマゴプリンを食べれば大麻がよりわかりますよ」

坂田は目を細くしたままジョイントを吸い、宙になめらかな筋を浮かびあがらせた。

八

アジャンタの夕食の時間は決まっていた。夕食の用意が整うと、働いている若いインド人の男が宿泊客の部屋をまわって、用意ができたと告げた。客は一階にある長細い食堂に集まり、テーブルにつくと、それを待つていたように料理が運ばれた。このとき、宿に泊まっている人間が全員そろうので、今はどんな人間がいるのか知ることができた。宿泊客どうしが会話に花を咲かせるようなことはほとんどなく、たいていはお通夜のようにそれぞれが黙々と食べていた。かといって、食べることだけに集中しているわけではなく、お互いの食事を確認して、それぞれの富裕をなんとなく読みとったり、小声で会話する人間に聞き耳をたてて、どんな人同士がくっついていのかを確認していた。

坂田は桜井と川内以外の日本人と話していなかった。日本人を見ることがない辺境の地で出会ったのなら、お互いの旅の過程を喜んで分かちあつただろうが、アジャンタでは日本人が珍しくなく、日本人しか泊まることができなかった。たとえ欧米人がアジャンタのチャイムを鳴らして扉を開かせたとしても、タメルがうまい口を開き、遠慮なく断ってしまうのだった。

アジャンタは日本人であふれていて、坂田はすすんで日本人と親しくする必要を感じなかった。それは、坂田と同様、宿泊している客のほとんどがそうだった。

若いインド人が夕食を知らせに来たとき、三階の中庭には坂田と

飯島、山田、そして川内がいた。

四人で食堂へ行くと、顔の幅が広い女性がいた。鼻は小さく、低く、モスグリーンのキャミソールからあらわになったたくましい腕をたるませて、頭をかがめてカレーを口に運んでいた。また黒い縁のメガネに前髪のかかった文学青年らしき男は、背筋をピンとたて、蠟人形ろうじやうのように料理が来るのを待っていた。また、頭の側面を刈りこみ、あごの角ばった男は、筋肉隆々（りゅうりゅう）とした両腕をテーブルにのせ、鼻息を荒くしてじっと待っていた。

食事をとっていると、遅れて桜井が入ってきた。坂田は桜井が遅れた理由が気になったが、あとで聞くことができるだろうと思いつくと、とくに尋ねることはせずに、静かに食事をした。ほかの人間も一度ふりかえっただけで、すぐに食べている料理に目をむけた。

坂田と川内はさきに食事を終えて、三階の中庭に戻った。飯島はマンガを借りたいと言う山田につきそって、図書室に行った。桜井は急ぐことなく、のんびりと食事をしていた。

坂田と川内がテーブルに戻ると、見知らぬ男が一人でギターをさわっていた。二人はテーブルにつき、団塊の世代らしき男に話しかけた。男はギターを黒いハードケースのうえに置いて、桜井に連れてこられたと笑いながら言った。

男は角田と言い、古代の中国人を思い起こさせる立派な髭を胸にたらし、頭は白く、はげていた。顔は細かったが、目は大きく、むかいあう者の注意をひく力強さを持ち、勇敢な男らしさがあった。鼻はすこし丸みがあったが、うまく顔を引き立てていた。角田の端正な顔は、若いときは美男子だったのではないかと思わせた。

桜井が戻ると、角田はうぐいす色の布袋から重厚なチラムを取り出し、柿色の麻のズボンからビニールに包まれた黒いかたまりをだした。黒いかたまりは大麻樹脂をかためた、いわゆるハシシだった。

角田は布切れを桜井にわたすと、桜井は洗い場に歩いた。角田はこぶしほどの大きさのハシシから一つまみちぎると、テールに転がっていた安全ピンにプスツとさし、ライターの火であぶった。ハシシのまわりから細長い火が上がり、角田がふつと息をふくと、香ばしい煙がたちのぼった。

角田は左の手のひらにハシシを押しつけると、黒糖色の中身を表してくずれた。それにタバコの葉をふりかけ、右手の親指でこねるように混ぜあわせた。角田は桜井から湿らせた布切れを受けると、水滴を一滴たらし、さらにこねてから、かたまりをチラムの口につめた。

角田は太いチラムと湿った布切れを桜井にわたし、小さくうなずきながら桜井の細い目をみつめた。桜井は子供っぽさの残る笑顔をうかべて受けとった。大部屋の壁にはりついた黒ずんだ蛍光灯はぼんやりと光り、大きな羽虫を呼びよせて、コツツコツツと音をたてていた。

「桜井君、それは大事なチラムだからね、気をつけて吸ってよ」

角田はかすかに、深みのある微笑みを浮かべて言った。

「はい、わかってますよ」

桜井は古墳から出土しそうな土器を両手に持ち、自信ありげに角田に返事した。土器は男性器が膨張したぐらいの大きさで、黄土色

をしていた。ゆるやかに先端にむかつて筒は広がり、胴体は簡素な彫刻がほどこされ、なにやらなまめかしさがあつた、桜井は筒の吸い口に濡れた布切れをかぶせ、右手の指で挟み、左手で隙間を埋めるように手をかぶせた。両手がつくった小さい穴に口をつけて、首をななめにかたむけ、クラリネットのような先端を上にもつけた。

坂田は待つていたとばかりに火力の強いライターをつけて、横から先端に近づけると、ゆらめいていた火はするどいはやさで筒に吸いこまれ、まが玉のような形に変わった。炎の線はいつさいのむだがなく、ツヤがあつた。すぐに煙の輪とともに火は体を起こしたが、瞬くまに筒に飛びこみ、再び体を起こして煙をたてた。火は桜井の呼吸にあわせて機敏に踊った。

「おおお、いい吸いつぶりだね！」

角田は顔をゆるませて、感心したようだった。桜井は横目で角田を見てから、機関車のように鼻から大量の煙を吐き出した。

「おお、桜井、すげーな！」

坂田はバカにしたような声を出した。桜井はそれにこたえて得意げな顔をしてから、左隣に座っている川内にチラムを渡した。

「あつたりまえじゃないですか！ ねえ、角田さん？」

桜井は角田の顔を見てあいずちを求めた。角田は一度うなずいた。

「それにしても、おまえ、すげー人つれてきたな」

坂田は鼻をひらかせ、角田をちらつと見て、桜井に言った。

「でしょ？ でも、角田さんを最初見たとき、日本人だってわからなかったですよ」

「そうなのか？」

角田はほづえをついて、にやけた顔つきで言った。

「だって、インド人にまぎれて踊っていたんですから、わかりづらいですよ」

「踊っていたって、おまえ、どっかのパーティーにでも行っていたのか？」

「そうですね、パーティーですよ！ もう、パーティー！ というのはですね、ほら、坂田君は昼前に外に出かけたでしょ？ ぼくはそのあと、川内さんと一緒に昼メシを食べに行っただんですよ。ですよね？ 川内さん」

川内はチラムを吸おうとしていて、うなずくだけだった。坂田はライターの火をつけた。

「近くの食堂でターリを食べたあと、ぼくは近くの寺院に行こうと川内さんを誘ったんですよ。川内さんぜんぜん外に出ないし、すっかりぼけはじめていますからね。ちょっとしたりハビリですよ」

「ゴフォッ！ ゴフォッ！ ゴフォッ！」

川内は小さく咳せきこんだ。

「それなのに、川内さんは宿に帰って昼寝すると言って、さつさと歩いて戻っちゃうんですよ。もう、まるで聞く耳もたないんですから。でも、せつかく外に出たから、ぼくは戻りたくなかったんですよ。それで、チャリンコを借りて一人で寺院周辺をサイクリングしていたんですよ」

「おまえもひま人だな？」

坂田は川内からチャラムを受けとりながら言った。

「なに言ってます、ぼくはマシなほうですよ。それで、寺院周辺でインドスイーツをたくさん食べて、満足して宿にむかって走っていると、びっくりですよ！ インド人の群れが前から近づいてくるんですから、それも大音量をはきだす軽トラックと一緒に！ 見るからに次元がゆがんでいるじゃないですか、びっくりしてぼくは道のはじによって、群れが通りすぎるのを待っていたんですよ。そうしたら、黒いインド人達はなれなれしさをこえて、家族同然にぼくに声をかけてくるんです、ぼくはチャリンコのハンドルを持ちながら適当に返事をしてしていると、インド人と一緒に踊っているヒゲもじやの人が話しかけてきたんですよ」

桜井はライターを坂田に近づけた。

「ああ、桜井君のあつけにとられた顔がじつにおもしろくてね」

角田は子供を見るような目で笑って言った。

「それでいきなり、ぼくの返事を待たずていねいにチャリンコのスタンドをおろし、カギをかけて、ポケットにしまっんですよ。ぼくは、『なにすんだよ！』と怒るまえに、状況がはあくできず、ぼう

ぜんとしましたよ。そうしたら、『さあ！一緒に踊ろうか！』と言って、ぼくの腕をひっぱって群集の中に引きこむんです。そしてどこからかジョイントを取りだして、うまそうに吸いはじめるじゃないですか！」

「いやいやいや、若い子と一緒に踊りたくてさ、つつい楽しくてね」

角田は坂田からチラムを受けとった。

「つついじゃありませんよ！いきなり、インド人が踊るなかに放りこまれたぼくの身になってくださいよ！」

「じゃあ、つまらなかったのかね？」

「いえ、楽しかったです」

「じゃあ、ノープロブレムだろ？」

「はっはっはっ、とんでもないじいさんだな！」

坂田は煙を吐き出しながら笑った。

「まったくですよ！ぼくはああいった、バカげた踊りが好きじゃなかったんです。顔を気味悪くニヤニヤさせて、脳を使わないサルのように踊る人間の気がしれなかったですよ」

桜井はライターに火をつけた。

「なに言ってんだよ、おまえだって、たいして脳を使ってないんじ

やんか」

「坂田君と一緒にしないでください」

「ボン、ボレナ」

角田は静かに言葉を唱え、野獣が雄たけびをあげるようにチラムを吸いこみ、異常な量の煙を鼻から吐きだした。煙はテーブルにいた全員の顔をやさしくさわった。

「はっはっはっはっはっ！ 角田さんの吸いっぷりはいかれるよ！」

坂田は太ももを叩きながら笑った。

「角田さん、ほんと、かつこいいですね」

川内はたちこめた煙に鼻をヒクヒクさせて言った。

すると、階段からマンガ本を持った飯島と山田があがってきて、真つすぐにテーブルへ近づいた。

「いい香りしてますね、ボンしているんですか！」

山田は叫ぶように高い声を出した。

「ああ、一緒に吸おうぜ！」

坂田は空いているイスに手をむけた。

「ぼくも一緒にしていいかい？」

飯島は脂あぶらぎったときつい顔で言った。

「もちろんですよ！」

桜井もうしろどなりにあるイスをテーブルに近づけた。角田と桜井のあいだに山田は座り、坂田と川内のあいだに飯島は座った。角田はハシシをビー球ほどちぎり、さきほどと同じように火をつけた。

「それで、ぼくは角田さんと一緒に踊りつつけて、宿に戻ってきたんですよ」

「えっ？ 踊りつつけたって、なに？ どうかでパーティーがあったの？」

山田はすばやく反応した。

「えっ？ なにって」

桜井は山田に顔をむけ、答えようとした。

「ああ、パーティーがあったんだよ」

角田はハシシをこねながら言った。

「いいな！ パーティーがあったんだ！ どこであったんですか？」

山田は手にこぶしをつくり、体を震わせて言った。

「小道だよ」

桜井はぼそつと言った。

「えええええ？ 小道で？ 小道って、ふつうの小道？」

「そつだよ、そこらへんにある小道だよ」

桜井はえらそつに言った。

「角田さん、この人数だから、おれ、ジョイントも巻きますよ」

坂田はそう言っつて、テーブルのうえにある青いリズラから巻紙を一枚とつた。

「ああ、そうしようか」

角田はりりしい目で坂田を見てから言つた。

「坂田君、おれも巻くよ、夜は長いから大量に用意したほうがいい」

川内はアジャンタのレセプションカードを指でちぎつた。

「あああ、そつだな、川内さん」

「すげー！ 道路でパーティーだ？」

山田は体を上下に揺らした。

「それだけじゃないよ、動くパーティーだからね」

桜井は手を横に動かして言った

「ええっ？ 動くパーティーってなに？」

「すごいよ！ 軽トラの荷台に、こんな大きなスピーカー力を載せて、心臓の鼓動を間違えさせるぐらい音を出しているんだから。それも、大量のインド人のオプションつきだよ」

桜井はイスから立ちあがり、手でスピーカーカーを型どった。

「すげー、楽しそう！ そいつは画期的だね！」

山田は体をさらに震わせた。

「いや、ほんと楽しいよ！ ねえ、角田さん？」

「ああ、まったく、すばらしいね！」

角田は片手を広げて言った。

「いいないいな、ぼくも参加したいな、ねえ、つぎはいつある？」

山田は目を輝かせて桜井に聞いた。

「どうだろう？ 角田さん知っている？」

「いや、知らないな」

「あの、うるさい軽トラックだろう？ あれならひんぱんに走って

いるから、明日も走っているんじゃない？ ほら、明日は土曜日だろっ？」

飯島は目を大きくして、たんと説明した

「そうですか？ 明日も走ってますか！」桜井は口をとがらせて言った。

「飯島さん、知っているんですか？」坂田はおどろいたようすで言った。

「ああ、寺院のほうへ行くと、よくみかけるよ。もっとも、ぼくは通り過ぎるだけだけどね」

「ええ、もったくない！」桜井はふざけた声をだした。

「おい、桜井、バカげた踊りが嫌いじゃないのか？」坂田はすかさず桜井に言った。

「ええ、嫌いだったんですよ、だったんですよ、今はむしろ大好きです！」

「軽いヤツだな」

「柔軟なヤツって言ってください。ねえ、明日、一緒に軽トラを探しに行かない？」

桜井は山田に向かって言った。

「いいねいいね！ もちろん行くよ！ ぼくさあ、眠るよりも、踊

「ったほうぐ体が回復するんだ」

山田は顔をブルブルと震わせた。

「角田さんも行きますか？」

「ははは、そうだな、約束はできないけど、タイミングがあったら行こうかな」

角田はチラムを持って、待ちかまえていた。

「他の人はどうですか？ とくに川内さんは一緒に踊ったほうぐいいと思います」

「ああ、そうだ、おれも行こう」川内はやる気なさげにこたえた。

「ぼくは、どうもね、遠慮するよ」飯島は笑いながら言った。

「そうですね、飯島さんは毎朝ヨガしてますもんね」

「おれは行かねえよ、めんどくせえ」坂田は手ではねのけて言った。

「坂田君には聞いてません！」桜井はそっけなく言った。

「なんだと！」坂田は体を前に出した。

「坂田君も一緒に行きましょうよ？ 踊るのが楽しいですよ？」

山田はなだめるように、明るい声で言った。

「そうか？　けど、なんかな、明日の調子によって決めるよ」

「そんなこと言って、どうせ行かないんだから」桜井があざけるように言った。

「おい、おめえはなんなんだよ？　このしりがる野郎が！」

「まあまあ、用意ができたことだし、ボンでもしようじゃないか」

角田は微笑みながら、やわらかい口調で言った。

「ああ、そうっすね」

坂田は思い出したように、とまっていた手を動かしてジョイントを巻きはじめた。

「おい、桜井、タバコがまじるけど、我慢して吸えよ」

坂田は人差し指と親指を動かしながら言った。

「ええー、イヤですよ、ぬいてください」

「おい、すでに入れたぞ」川内はジョイントの先をつまみ、前後に振りながら言った。

「ええええ！」

「べつにいいだろう？」川内はどすのきいた声で言った。

「まあ、しょうがないですね」

桜井は残念そうに言い、ライターの火を角田の前にもっていった。

「ボン、ボレナ」

角田はさきほどよりも激しく、魂をこめるようにチラムを吸った。丸いラツパ型のえんとつから、ゆんやかに煙が数回広がり、靈氣をふくんだエクトプラズムを吐きだすように、流動的な息を吐いた。

「はははははは！ すげー！ はははははははは！」

山田がかん高い声を狂ったようにあげた。

「いや、すごい！」

飯島は顔を凍らせ、冷静なくちぶりで言った。

「もう、角田さん、年季はいりすぎだって！」

坂田は巻紙のうえの大麻を大量にこぼしながら言った。

「だって、角田さんは神ですから、もう芸術ですよ！」

桜井は自分のことのように言った。

「ほんとすごい！ それに、このイタリアン・チラム、そうとう年季が入ってますね。はじめて見ましたよこんなの！」

山田は角田からチラムを受けとり、顔をちかづけて言った。

「いや、なに、使っていればかってになるさ」

角田はあたりまえだと伝えるように言った。

「ええ？ どのぐらい使っているんですか？」 山田は角田の顔を見た。

「どれくらいだろうな？ たしか十年前だったかな？ コルカタの宿で知り合ったイタリア人にもらったんだよ。だけど、もらった時点でだいぶ使いこまれていたな」

角田は懐かしそうに言った。

「ええええ？ 十年前って？ 角田さん、いったい、いつからインドにいるんですか？」

坂田はできあがったジョイントに火をつけるのをとめた。

「忘れちまったな、どれぐらいかな？ たしか、きみたちと同じぐらいの歳ごろに来たから、そうだな、もう、三十年はなるかな？」

「アナタたち、ヤシヨクハナニタベル？ ホラ、イツコタバタラサ
ンコタベルヨ、タマゴプリン、ナンコタベル？」

階段からタメルの声が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3640p/>

沈没

2010年12月21日21時55分発行